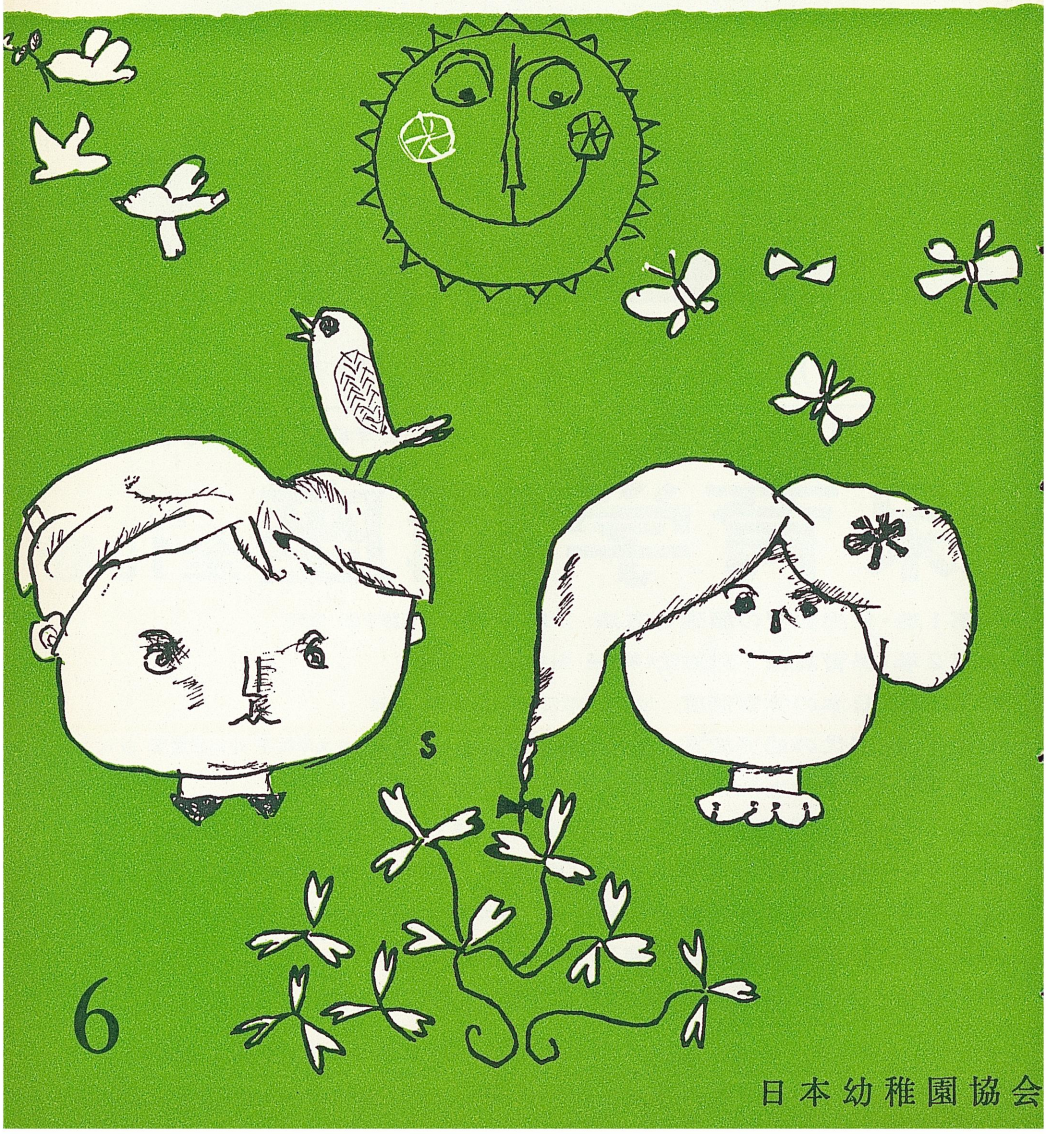
家庭・保育所・幼稚園

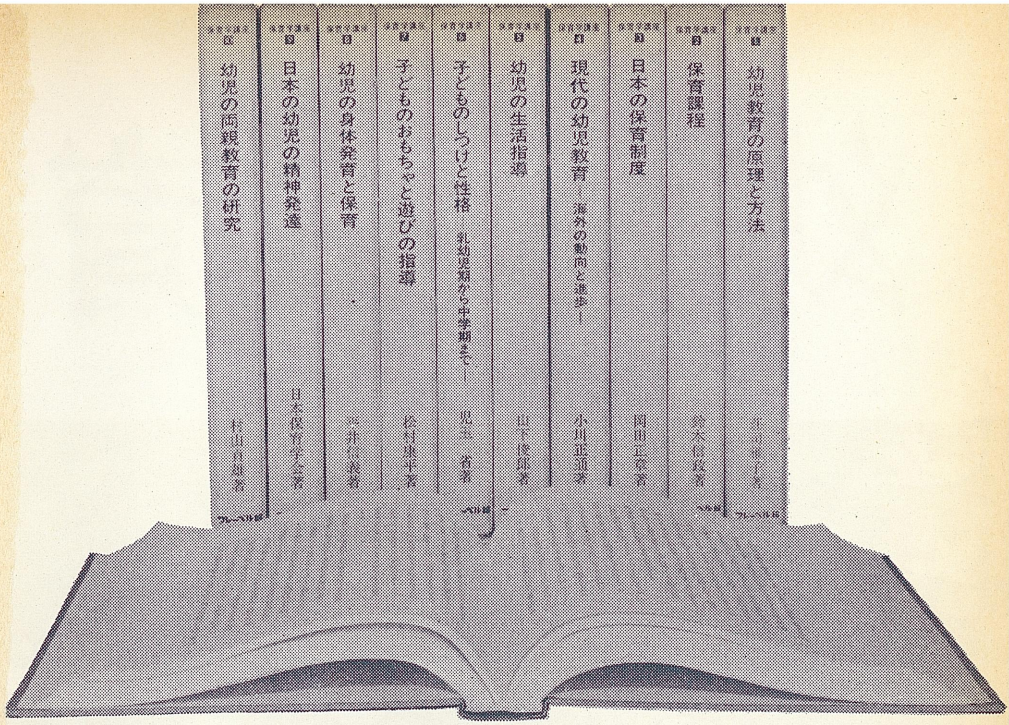
幼児の教育

第六十九巻　第六号



6

日本幼稚園協会



保育の原点をさぐる全10巻！

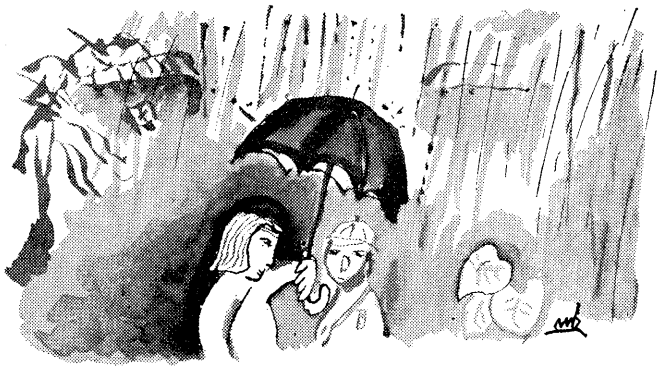
日本保育学会監修　　日本保育学会発足20周年記念出版

保育学講座 全10巻

- ●第1巻・幼児教育の原理と方法　広島大学教授　荘司雅子著　既刊
- ●第2巻・保育課程　愛知教育大学教授　鈴木信政著　既刊
- ●第3巻・日本の保育制度　明星大学教授　岡田正章著　既刊
- ●第4巻・現代の幼児教育—海外の動向と進歩—　大阪市立大学教授　小川正通著　既刊
- ●第5巻・幼児の生活指導　東京家政大学教授　山下俊郎著　近刊
- ●第6巻・子どものしつけと性格—乳幼児期から中学期まで—　日本女子大学名誉教授　児玉省著　既刊
- ●第7巻・子どものおもちゃと遊びの指導　お茶の水女子大学教授　松村康平著　既刊
- ●第8巻・幼児の身体発育と保育　お茶の水女子大学教授　平井信義著　既刊
- ●第9巻・日本の幼児の精神発達　日本保育学会著　45/6月刊
- ●第10巻・幼児の両親教育の研究　日本女子大学教授　村山貞雄著　既刊

A5判・上製本ケースつき　定価・各巻1,200円　全巻予約特価 各1,000円

もよりの代理店・支社・支店・出張所にご用命ください。　発行・株式会社 フレーベル館



幼児の教育　目次

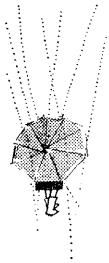
——第六十九巻　六月号——

表紙　鈴木義治

沈黙のこころ……森田宗一…(2)
入園期・子どもと保育者の心のつながり……堀合文子…(6)
手先の動きと子どもの感情②……清水エミ子…(15)
サンド・プレイ・テクニック（箱庭療法）について②……秋山達子…(24)
★ヨーロッパの旅㈢……平井信義…(33)
★問題行動の研究㈡……児玉省…(38)
北欧保育短信㈣……飯田泰造…(46)
生きている音楽教育—コダーイ・システム……加勢るり子…(51)
幼稚園のある一日（二月）……内田和子…(54)
★筧雄平について㈢……岡部茂…(65)

沈黙のこころ

森田宗一



一、母の味と沈黙の味

「母親がもっと言葉を少なくして見守る忍耐をもち、沈黙の意味を悟り、父親がもう少しさりげない表現を多くし、ユーモアの味をかもしだすようにしたら、日本の家庭はもっと安定し、子どものしつけもうまくいくだろう」私はいつもそう思う。事実しあわせな家庭とか、成熟度の高い安定した家庭、すくすくと情緒豊かな子どもが育っている家庭は、おおむねそういう家庭のようだし、問題の起こりやすい家庭はそうでないように思われる。

母はお袋と呼ばれるように、おおらかでどっしりとして、何ものをも抱擁し、いつも心のよりどころとなるもの、とくに人生の旅に疲れ、やるせない思いにひしがれたとき、それをやわらげいやしてくれるものである。

ふるさとの山に向かいて言うことなし

ふるさとの山はありがたきかな

啄木のこの歌の心も、母なるふるさとへの郷愁と心の痛みをいやされた感慨にほかならない。囚われの身の人々の詩歌や俳句に共通しているのは、母でありふるさとであることは周知のところである。そのお袋とかふるさとのイメージは、ガミガミイライラした言葉の多いものでなく、むしろ無言の味わいではないだろうか。

かたくなな我の心に灯をともす母に会いたき日々を過しぬ

乳しぼり乳の香りに母さんをふっと思えり暗き牛小屋

山煙る雨となりたる夕食後母恋う思にただ走りつぐ

さびしければ大声あげて母と呼ぶ山みな眠りこだまなき夜

落書の母という字のなつかしく母在る如く壁に物いう

背の傷のわが思出のはるかにて悪童の日日は母を泣かせし

切々とした母（ふるさと）への思いが、彼らのさいなむような

過去の罪過への痛恨をやわらげ、新しい人間的な心情を蘇らせてくれるのである。

母を思う心は、必ずしも肉親の母親を慕うだけでない。母を象徴するものは、たえずその対象となる。ふるさとの山河、どこまでも続く草原、黙々とした砂丘、ゆうゆうと流れる大河、静かな海、うねうねと連なる山並、いずれも母を連想させる。とりわけ春先草木の萠えいでる前の畑の起伏や丘のようすは、母そのもの、まさに母なる大地である。そのいのちをはらんだ沈黙の大地に、人は大いなる母性を感ずる。そういう光景を眺めて、〝あっ！お母さんのようだ〟と叫んだ少年がある。それが彼の更生への転機になったという。なつかしい母の体への連想でもあろう。その豊かな体の内に無限の生命をはらむ静かな大地は、人の心にいのちへの敬虔さを悟らせる。

ものの芽をふふむ大地に畏れ佇つ

私も同じような大自然の光景に接して心うたれ、こんな句をつくったことがある。その畏れの思いに続いたものは、いのちの源である母、わが心のふるさとなる母への慕情と畏敬の心だった。

「自分は、父から人生を必死に生きぬく力、天をあま翔る力を学び、母からは大地の味を学びました」というインディラ・ガンジー夫人の言葉は、まことに含蓄がふかいと思う。この大地の味という言葉の中には、偉大なる沈黙と深い祈りといったものがこめられているようである。いつの世も親が子に伝えうるもの、子が親から学ぶべきものの最大なものが、ここに語られていると思う。この頃のわが国では、母親がこまかくうるさすぎ、母親がいるためにかえって家庭がホッとできない、安定感がないという子どもがふえている。あまりに言葉が多く、「お勉強」とか「しつけ」「おけいこごと」などに、お説教が多い。そのために子どもは疲れ、息ぎれしている者さえ少なくない。「お母さんがガミガミやかまし過ぎ、お父さんが叱るべきときにもさっぱり何も言ってくれない。それが不満だ」などという子どもが多い。人生の経験をふまえた幅のある父親の適切な指南と、母の横顔うしろ姿による無言の教えがほしいのである。それが子どものまことのニード（欲求）というべきものである。

こんな一中学女生徒の日記がある。ある家庭教育資料に掲載されたものだが、心うつものがある。この娘はふだんはたえず母と言い争いをしていたらしい。母親も教育熱心でロうるさくこまかいことをとりあげて叱る。言葉の多い真向きの関係が悪循環となっていた。ところがある日の日記にこんなことが記されている。

七月十五日　日曜　曇のち雨

「きょうはふしぎな日だった。おふろで、いつも母の背中をこするのがいやでたまらないのに、きょうはこすりたくて、母もたいそうよろこんでくれた。どういう風のふきまわしやら。わたしは

さいきん母からだんだん離れていくような気がする。小さいときにはどこに行くにも母といっしょだったが、このごろでは別々のことが多い。酵母菌が母体を離れていくように、わたしも母から離れてしまうのではないだろうか。母ははじめはわたしにとって、なくてならない人であった。それが今では、あってほしい人になった。わたしは大きくなることはよろこばなければならない。でも、母から離れていくのはさびしい、なんだか母を裏切っているようで、たまらない気がするときがある」

やがて何日かたったある日に、次のような心うつ記載がある。

「学校から帰ってくると、母がいつになく興奮している。なんでも目の見えなくなった女優さんの自叙伝を読んだのだそうだ。目をまっかにしていた。わたしは、読書に興奮して自分の考えをまとめようとしている母の姿をはじめて見た。わたしは母を仰ぎ見る気持だった。」

これこそ新しい母の発見であり、新しい母子関係の再出発である。横顔ともうしろ姿ともいえる母の姿に触れて、今まで言葉多きが故に見失われていた母と子の出会いが、見出されたといってよい。

二、母子像と心

さて、私はいつも二つの母の像を仰ぎ、心の糧としている。一つは、ある神父さんから贈られた聖母像である。石こうで作られたものだが、ルルドの洞窟をかたどった岩を背景に沈黙の聖母が静かに立っている。キリストの聖母として、天地の元后、天の門、暁の星などとたたえられるこの母は、人類永遠の母の象徴ともされ罪に泣く者を救主にとりつぎ、たえずわれらのためにとりなしの祈りをなし給う方と敬愛されて来た。その聖母像或は聖子を抱いた母子像は、キリスト教の信仰生活を豊かに支えて来ただけでない。二千年の文化歴史を通じ、絵画、彫刻、文学、詩歌、音楽、あらゆる芸術の領域において、人間が表現しうる限りの方法で、その美と聖と豊かさと深さが表現されつづけてきたのである。

ヨーロッパの田舎道でよく見かけた聖母像には、野の仏に感ずるような素朴な沈黙の味があったように記憶する。遊びほうけてその前を駆け過ぎた村童が、何思ってか走りかえってきてその像の前でいそいで十字をきり、また走り去った光景も時々見た。ほほえましく心うつものだった。今も尚あの子どもらの生活の中に生きている聖母像である。

「仰せのごとくわれになれかし」と謙遜に召命にこたえて以来ベツレヘムの星をのぞみ、ナザレの空を仰ぎ、苦難の道たどる救主の母としてゴルゴダの丘に至るまで、沈黙と従順を全うされた母マリアは、私にとっては一般のキリスト信徒のそれ以上のものにさえ思える。自然のままの母的なものにとくべつに弱い者にと

っては、しばしば秋霜の如くまた烈日のようでもある。日々の生活のかなめともなってくれる。

私の毎日仰ぎ見て心の糧としているもう一つは、東京家庭裁判所の正面玄関に安座している母子像である。これは文字通り、どっしりと大地のような母、風雪を耐え腰のすわった日本的な母が、赤子に乳をふくませている姿である。彫刻家向山狭路氏が、自分の母への感謝の念をこめて製作したもの。数年間旧庁舎のせまい入口におかれていたが、新庁舎落成の時、石庭を配した正面玄関のホールの一隅に安定する座を得たわけである。

母子像も所を得たり野菊晴

新庁舎落成を祝っての私の一句は、何よりもこの母子像にささげたものである。この母子像の大変日本的な素肌のままの素朴な味は、われわれ自身の母を連想させる。しかしそれゆえにこそまた万人共通のもの、普遍につながるものである。この母子像の傍には、花崗岩の台座に「心」の一字を大きく刻したいしぶみがおかれている。この「心」の字は、弘法大師の筆で、漢の名家崔子玉の座右銘からとったものである。母子像とともに家庭裁判所の門をくぐる人々の眼にふれる。家裁の象徴といってもよいだろう。

母子像と並んだこの弘法大師筆の「心」を何と解するか。「慈悲心」「菩提心」「菩薩の心」いずれも可なりであろう。「忍ぶ心」もしくは、「誠心」と解するのもよいかもしれない。しかし私は「沈黙の心」と解し、いと小さき者を「愛惜する心」と注をつけたい。それこそ真の保育の心であり、教育の精神だと思うのである。二つの母像に共通するものは、何よりもそういう心であるように思われるからである。

現代という社会は、よろず急ぎ易い騒音の多いときである。情報過多の時代である。人と人との間も、言葉多くしてかえって理解に遠ざかるということが多い。無闇に言葉が乱れとんで生命のこもる真実がない。今の世界全体が騒音の中の急ぎ過ぎのため、つんのめっていつ谷底へ落ちこむかわからない。能楽でいう「せぬこころ」というものが大切なように思う。沈黙の心とはただだまっているということではない。深いものを内にたたえた黙想であり、時あってはさりげないユーモアに通じるものである。「せぬこころ」とは、「言葉、立ちはたらき、物まねの色々、身になすわざのひま」である。「ひまびまに心をすてずして、用心をもつ内心である。この内心の感外においておもしろき也」(世阿弥)。この心こそ、現代の教育に、そして現在の社会に大切なものであろうと思う。

母の再発見のため、保育の心の再認識のため、私は今日この頃そのことを痛感している。その沈黙の心のあるところから、本当の保育もいのちあるいろいろの業(わざ)も始まるように思われる。

(東京家裁判事　お茶の水女子大学)

入園期

「新しく幼稚園に入ってくる幼児にとって、これから続く幼稚園生活は楽しいものであってほしい。子どもたちが、十分満足して遊べるためには、子どもが幼稚園や、友だち同士に早く安定感を持ち、保育者との目にみえない心のつながりをつくることが第一です。そのための入園期における先生と子どもの努力は、他の一、二年にまさるものが必要です」……と語っておられるお茶の水女子大学付属幼稚園の堀合文子先生に、入園期における保育者の考え方、心の持ち方、子どもとの関係などを中心にお話していただきました。

子どもと保育者の心のつながり

堀合　文子

一、入園式をむかえるまで

新入園児をむかえて、入園式の次の日からどうするかということですが、入園式の次の日のためには、前もって相当準備が必要です。先生にとっては、入園式をむかえるまでに、大事なことがふたつあります。

そのひとつは、先生自身がどういう心がまえで、新しい子どもを受けとるかということ、もうひとつは、お母さまたちに幼稚園についてある程度わかっていただくことです。

このふたつが土台になって、次の日からどうするかにつながります。

(1)先生自身の心がまえ

まず先生自身の心がまえについてですが、先生は前年度の子どもたちとの生活で、その子どもたちにふさわしい先生になっていますので、新入園児の先生になるときには、自分をきりかえて新入園児に適切な先生にしなければなりません。何を準備するより

も、まず、自分を新入園児に適切な先生にすること、これが根本になります。

たとえば、前年度、五歳児のクラスを受け持っていて、三歳児をむかえる場合には、先生は、相当、努力して、自分自身をきりかえなければなりません。五歳児ですと先生と子どもが対等で、お互いにことばだけで、理解できたり、先生のことばで、子どもが行動することができますが、新入園児には、それは不可能なことです。そこで自分自身を切りかえないと、三歳児なり四歳児なりを大きく扱ってしまい、三歳児を三歳児として、接することができなくなります。そして五歳児の程度をさげたような保育になってしまうようなことにもなってしまいます。

先生が子どもの年齢に合わせて、自分自身を切りかえることは子どもにとって重要なことであると同時に、先生にとっても向上する機会になるのではないかと思います。

そこで自分自身を切りかえる方法ですが、三歳児、四歳児を知るために、児童心理の本を読んだりして、発達状態を理解する等の勉強をすることが大切です。ただことばをやさしくする等の形式だけではありません。

知っているつもりでも、もう一度身体的精神的の発達状態を勉強することが、また新しい考えをもつ一つの機会になりますし、新しい子どもに適切な保育を始めるために必要だと思います。

(2)両親に話しておくこと

次に、両親に理解しておいていただくことは、幼児教育を大まかにつかんでいただくことです。

・子どもの仕事はあそびである

子どもの仕事はあそびです。あそびを十分して、その中で子どもはいろいろと経験しながら大きくなったり、知識を得ていくのであって、幼稚園では、先生がその場に応じて指導します。幼稚園は絵をかいたり、歌が上手になったり、字がかけるようになったりするところではなくて、それは結果的にできるようになるのだということを理解していただきます。

子どもは幼稚園にきたら団体生活の中で、友だち関係の間で、自分を全部出すことが大切です。よそゆきのような態度だとほんとうの教育はできません。赤裸々な姿こそよき教育ができるのです。幼稚園ではまずはじめは自分を出すように指導しますから、お母さんには「お友だちと楽しく遊んでいらっしゃい」とひとことといって送り出してほしいということを話します。乱暴もするし、いじわるもするし、いいこともわるいこともみんなして、それでいて、先生がいて、指導します。

お母さんが「先生のいうことをよくきくんですよ」とか「お行儀よくするのですよ」といわれると、子どもは正直ですからよく守ってしまいます。守られると自分を出せなくなりますから、そ

ういうことはいわないでほしいということを話します。

・服装について

幼稚園では、子どもは全身全霊をぶつけて生活しますから、どろんこになってとてもよごれるということ、よごれてもいい洋服で幼稚園にきていただきたいと話します。子どもがどろんこになって帰ってきたら「ああ、よく遊んできたわね」ということばが出るような気持になっていただきたいのです。

・子どもを送る時に

もうひとつは、これは方々に通用するかどうかわかりませんが、ここの幼稚園では父兄が幼稚園まで子どもを送ってきます。子どもを送ってこられる時、幼稚園で「うちの子どもは何をしているのかしら？」「けんかしたりしないかしら？」と、心配なことはよくわかりますが、子どもが幼稚園の生活に慣れて、十分生活ができるまでには一、二週間から一ヶ月もかかりますから、子どもを送って来られたら、「いっていらっしゃい」といって帰っていただきたいと話しておきます。子どもが泣いているのを無理にひきはなしたりはしませんが、子どもは、たとえ泣いていても、自分で独立したい気持もありますから、その気持を出せるようにする必要があります。このことも前もって話しておきます。子どもはお母さんから離れるのが平気でもお母さんの方で心配して子どもについていて、それも、だまってついているのならまだいいのですが、子どもに干渉している場合が多いのです。

このようにして、迎える側も準備するし、送り出す側も心がまえがあるということになります。新入園児の父兄にお話ししておくことは、幼児教育のほんの入口だけですが、あとは、おいおいに、自分の子どもをとおして、話し合って理解していただくことになるでしょう。

(3)計画と準備

・家庭と幼稚園の環境の差を少なくする

新入園児は家庭から団体生活に入りますから、環境の差をなるべく少なくして、子どもを自然に無理なく団体生活に入れるくふうをします。そのためには、それぞれの幼稚園の地域によって考えなければなりません。一般論も必要ですが、もっと具体的に新入園児について考えることが必要になってきます。子どもたちが家庭で生活している環境について考え、そこで動いている子どものことを考えます。遊び場所もなくて、家庭の中にとじこもっている子どもが多ければ、家庭の中のようすに近づけて保育室を準備することになります。

たとえば試みとして、次のようなことをしたことがあります。

三歳児を迎える時でした。学校形態にはまず机といすがありますが、家庭では部屋いっぱいに机といすがおいてあるということ

はありませんので、子どもにとって、抵抗があるのではないかと思い、机といすを少しだけおいて、床を広くしてみました。このようなことからも考えてみる必要があるのではないでしょうか。

子どもが生活している場面について、こまかく想像してみたり、考えたりすることは、準備であると同時に、こまかい計画だと思います。具体的にこまかく考えることは子どもにプラスになるのではないかと考えます。

家庭と幼稚園の環境の差を少なくすることについて述べましたが、なぜ環境の差を少なくするかといえば、子どもにはいろいろな性格の人がいます。すらっと入れる人もありますが、敏感で気になって自分の活動ができない人もあります。子どもが自分の活動ができるためには、活動しやすい環境をつくっておくことが必要です。子どもが幼稚園に来た時、先生も努力しますが、その前に家庭と幼稚園の環境の差を少なくしておくことも大切です。

子どもが幼稚園に来たら、その時は、何の先入意識をも持たないで、幼稚園の中で活動している子どもを見ていくことになります。

・遊具について

どのような種類の遊具をおくかということですが、初めのうちは家庭で子どもたちがつかっているような遊具をわざわざおきます。たとえば動力の遊具、線路のあるものなどです。「あっ、うちにある、じどうしゃ」といって、子どもが親しみを持てるようにするためです。しかし、このような種類の遊具は将来まで長い期間にわたってそのままおくのではなくて、子どもたちのようすをみて、適切な時期にとりのぞきます。いつとりのぞくかは、子どもたちの状態をみて、たとえば一学期は出しておくが、二学期からはとりのぞくというような配慮が必要です。線路を例にとると、子どもたちがつみ木でどんどん線路をつくれば、その時は、もう、できあがった線路は必要ではありません。

やはり、遊具の種類についてですが、ブロックなどいろいろな種類がありますが、初めのうちは、その中の一種類だけ出しておいて、子どもたちが慣れてきたら、そこへ、また加えていくということになります。

次に遊具のおき方ですが、今までいかにもつかっていたような状態にしておきます。ままごと道具でも、わざわざごちそうを茶わんにのせておいたり、絵本も本棚から出して広げておいたり、つみ木も箱から、ばらばらと出しておいて、自分が出してくるのではなく、いじれば、すぐに、つかえるようにしておきます。「あ、楽しそうだな」「あそびたいな」というふんい気を出しておくのです。

このような準備がなされ、子どもは幼稚園にきます。

二、新入園児をむかえてから

(1)先生の行動

・子どもたちの名前をおぼえる

先生が子どもたちの名前をおぼえて、入園式の日に子どもの名前を呼ぶことは大切なことです。ただ名簿でずらずらと呼ぶのではなくて、努力して一日で覚えてしまいます。これが先生にとっても便利だし子どもと先生とをつなぐ一つの大きな手段にもなります。先生が子どもと会った時に子どもの名前を呼ぶことは大事だと思います。子どもはふしぎなもので、名簿でよばれたのとちがって、先生に、自分の名前を呼ばれることは、あしたからが楽しいわけです。「自分の名前を先生が呼んでくれたといって、とてもよろこんでいました」というようなことをお母さんからきくこともありますが、名前をおぼえておいて、子どもの名前を呼ぶことは重要なことでしょう。入園式の翌日からのあそびの中でも、子どもたちの名前を呼ぶことは大いに活用することになります。

・朝のむかえ方

朝、子どもたちをむかえるときの大切さは子どもたちが入園してから一年たっても、二年たっても同じですが、子どもたちが幼稚園に慣れるまでは、特別に大切です。ひとりひとりの子どもをていねいに、にこやかにむかえて、そこから個人個人の指導がはじまります。「おはようございます」とにこやかにやさしくむかえて、そのむかえのいかんによって、その子どもの一日が楽しくもつまらなくもなるといって過言ではないくらい大切です。特に入園時は先生のむかえ方により、泣きたくも泣けないでしらずにあそんでしまうという例もあります。次の瞬間は、もう、団体生活に必要なことがらに入っていきます。朝、幼稚園に来ると、手を洗うことと、うがいをすることがありますが、入園式の翌日は子どもは何も知らないで幼稚園に来ますから、先生は「〜ちゃん、おはようございます」とむかえ「手を洗ってきましょうね」といって、子どもといっしょに水道のところに行きます。

子どもが自分で手を洗える子には「洗ってね」といえばよいのですが、自分で手を洗えない子どももいますから、その時は、先生が水道の蛇口をひねります。そうすると、手を出して洗い出す子どももいます。しかし三歳児ですと、蛇口をねじっても、洗わない子もあります。その時は、先生が自分の手を洗ってみせる時もありますし、その子どもの手を持って洗うこともあります。手を洗うことひとつをとってもその子によってちがってくるわけで、このようなことは何でもないことのようですが、次の活動が順調にいくことにつながると思います。表面的には何でもないことかもしれませんが、精神的にはずいぶんちがってきます。子どもがふたりいっしょにくればふたりいっしょにしますが、三十五

人いれば三十五回するような気持ですることが必要です。

手を洗い、うがいをすませた次の瞬間にはあそばせるということがあります。先生がいっしょにあそぶのですから、先生はとてもいそがしいのです。一方では登園してくる子どもをむかえ、もう一方ではすでに登園している子どもをあそばせます。入園当初は、ひとりひとりばらばらで、グループはありませんから、ひとりひとりの子どもに話しかけます。先生がだまってしまうと子どもの生活に穴があきますので、本を見ている子どもがいれば、手を洗いに行く通りがかりでも「あら、おもしろいものがあるわね」といって通ります。

入園当初の一週間は先生は一日中しゃべっています。先生が一日中しゃべっていて、子どもたちは、みんな忘れられていないということで、気持もまぎれ安心感や安定感を持てるのでしょう。だまってしーんとしたり間があくと、入園時は家が思い出されたりして、泣かなくてもよい時に泣いたりすることにもなりかねないのです。

よく話す、話しかける、間をあけないことが一つのこつでしょう。

子どもの中にはしぶしぶしてあやしい子と活発に活動していても時にはあやしくなる子もあります。入園当初のものはその子本来のものとちがってあらわれている場合がありますので、この点も子どもたちをみながら先生は判断していくことになります。

活発であやしい子のために、保育室が玄関に近いような場所にある時は、保育室の戸をあけておかないで閉めておくこともちょっとした注意になるかもしれません。

このようにして一週間くらいたつと、子どもは幼稚園の生活に慣れてきて、子どもの活動がどんどん出てきますから、子どもの活動範囲もひろがって、子どもがあちこちで自分の活動を楽しみはじめます。

朝、子どもが保育室に入って来る時のようすをみると、さあっと入ってくる子と、しぶしぶ入ってくる子があり、それぞれ程度があります。さっと保育室に入ってきて自分から活動できる子と、しぶしぶしていてあやしい子を見ぬくことが大切です。しぶしぶしてあやしい子は先生が手をひいて離さないようにします。それで子どもは安定感を持ちますが、手をつないでいるだけでは足りなくて、なんだかんだごしょごしょと話します。あやしい子が多いときは「あなたここにつかまってね」「あなたはここね」と先生のあちこちにつかまらせます。あやしい子たちだけにかまけてはいられませんから、どこへでも連れて歩くことになります。次の日も、同じようにします。そのようなくりかえしが一週間く

らい続くでしょうか。ある日、ふっと、子どもが自分から活動しはじめます。

・先生の居所をはっきりと子どもたちにわかるように話す

子どもの活動が活発になり、子どもが保育室から庭に出かけるようになった時には、「先生はここにいるから、ここに帰っていらっしゃいね」と話します。保育室でも何人かの子どもが遊んでいるし、庭でも子どもが遊んでいて、先生が、庭に出ていく場合には、保育室にいる子どもに「先生は庭の○○へいってくるわね」と話してから出かけます。その間には、お手洗いにいきたい子どももでてきますから、「先生は○○ちゃんとお手洗いに行ってくるわね」というように行き先をはっきりして出かけます。

子どもが出かける場所は危険がなくて安全な場所であること、先生の居所がわかり、帰ってくる場所がはっきりとわかっていること、先生は子どもの行き先を知っていることなどでお互いに安心して活動できます。しかし、不安で先生につかまっている子もいますから、先生はそういう子ははなさないで連れて歩きます。

このようにお互いに「いってくるわね」とか「いってらっしゃい、先生はお部屋にいるから、用事があったら呼んでね」等と話すことによって、一対一の信頼感を持てるようになるのです。

・子どものせわ

幼稚園での子どもたちのあそびの種類や経過をみるとこれは時代がかわってもだいたい同じようです。

入園当初にも関係しますが、まず〃おもちゃの移動〃があります。入園式の翌日から子どもたちがおもちゃを移動する場合があります。おもちゃのおいてある場所からおもちゃを運び出して、別の場所にあつめるのです。子どもたちは、〃しょうぼうしゃ〃だとか、〃おひっこし〃とかいっています。次に〃砂あそび〃のようなものがあり〃おままごと〃があります。おままごとはこのごろでは内容がだいぶかわってきて、〃おいしゃさんごっこ〃〃ちゅうしゃ〃です。次に〃ねこごっこ〃や〃犬ごっこ〃があり〃おひめさまごっこ〃〃ようちえんごっこ〃になります。それから、いわゆる小学生がしているようなゲームで〃わらべ歌〃〃人工衛星〃等があります。その間にその時代にはやっている〃ウルトラマン〃とか〃サインはV〃等がはいってきます。こうしたあそびは、だれも教えるわけではなくて、自然に出てくるもので、ふしぎなことです。

子どもたちがある程度幼稚園に慣れてくると、子どもが安心感を持ってきますからいろいろな活動ができます。友だち関係もできてきますから、子どもたちは、子どもたち自身とても楽しく活動します。友だちといっしょにあそんで楽しくなるとめちゃくちゃのあそびになって、いわゆる〃おひっこし〃がはじまるし、人

形はほうり出すということになります。楽しさのあまりに、いわゆるめちゃくちゃ式のあそびになります。このようなあそびはある程度はやらせますが、折をみて、「お手つだいさんになりましたよ」といって掃除したりして、あそびというものを幼児があそびの中で考え、創造できる余ゆうのあるあそびにすること、それには、次第にめちゃくちゃでなく道にのったあそびにする必要があります。

また砂場のあそびがさかんになってくると、エプロンはよごれる、くつ下はよごれると大変なさわぎになります。ある程度は、まくったり、はさんだりしてあそびつづけますが、あまりどろんこになった時にはとりかえてあげます。そして、よごれた衣服を洗たくします。子どもたちがあそべるようになると、先生にくっついている人が少なくなってきますから、手のあいている時には、洗たくする時間はできてきます。洗う時間がない時には放課後洗います。「先生、洗っておいてあげるわ」と子どもに話しておきます。これらのように子どもは、自分の世話をしてもらうと自分のエプロンを洗ってくれたということでも、先生に対する信頼感や心と心のつながりがめばえるのではないでしょうか。

・いわゆるあそぶこと

子どもと先生がお互いに親しみを持つためのひとつに先ほど子どもの世話をあげましたが、もうひとつ大切なことがあります。それは、いわゆる子どもと先生が、あそぶということです。その子どもの、その時によってちがいますが、子どもと先生があそぶことによって子どもは次の段階にすすんでいきます。

この先生と子どもがあそぶということは、ただつみ木をつむとか、絵本を読んであげるということではありません。いつ機会がくるか、どんなあそびになるかはわかりませんが、必ずその機会があります。このあそびはいろいろな種類がありますが、たとえば、馬になって床をはったり、子どもをおぶって走りまわったりするのです。子ぼんのうなお父さんがするような種類のあそびでしょう。このようなあそびをすると、それまでこわい顔をしていた子どもがきゃっきゃっといってよろこびます。そして、子どもの気持がほぐれてきます。

子どもはおもしろいもので、このようなあそびをすると、それをみておとなをけいべつするようなわらいをしたり、自分もやってもらいたいと思ったり、そうかといって、おんぶされるのははずかしいと思ったり、そこにはいろいろな心理があります。

このようなあそびの瞬間のうごきは、教育的でも何でもないようなことのようですが、大切なことです。

しかし、たとえ子どもをおぶって走りまわっても、かわいがっておぶうとか、または、からかう意味でおぶうのは、たとえ体と体がふれあっていても、それは何の役にも立ちません。

ひとりひとりの子どもについて、試行錯誤していきます。

このようにして子どもたちの活動がはじまりますが、きょうは子どもたちが割合あそんだな、はわたしもいっしょにあそべたな、と思う日もあるし、きょうはあまりあそべなかった、お手洗いと保育室を通うのに一日をすごした、と思う日もあります。

きょうは子どもの世話でいそがしくしていてあそんであげられなかったという日もあります。ちょうど、親がいそがしくしていてかまってあげられなかったのと同じような状態になることもあるのです。そうすると、かえって、子どもがよくあそんでいて、あらと思うこともあります。

ともかくそのころの毎日は平たんではなくて、まして、きのうのあそびが、きょうにつづくということはありません。子どもがあまり遊ばなかったり、泣く子がいたり、かと思っていると翌日はけろりとして、今まであそんで安心していた子が泣く日もあったりと、よくあそんだりあそべなかったりのくりかえしが一ヶ月くらいつづくでしょう。もちろん、何かしようということはありませんから、子どもが、毎日楽しくあそんでくれればいいということです。

はじめのうちは子どもたちがあそんでいてもひとりひとりばらばらにあそんでいますが、日がたつにつれてふたりであそぶようになってきます。そのころの毎日は一日一日とかわっていきます。

はじめのうちはみんなの中であそんでいるように思えた子の中に、一週間くらいたった頃、子どもたちの活動がどんどんでてくる頃に、慣れにくい子どもが、はっきりとしてきます。そこで先生はそのような子に集中して、あそぶということになります。

自分の活動を出しにくい子どもは自分でじっくりあそびにとりくむことができませんから、他の子どもにおくれるばかりでなく、生活に穴があきます。あそべないから幼稚園がつまらなくなっていやになり家の方がいいということになります。これはとてもこわいことです。こういうことにならないために、先生と子どもがあそぶということはとても重要なことです。

子どもどうしの友だち関係ができはじめると、子どもどうしの直接の交渉が重要ですので、そのときはまた、先生はいろいろと試行錯誤することになりますが、まずはじめは、先生に信頼感を持ってもらうことが大切で、そのために子どもの世話をすること、子どもとあそぶことが大切な一つとなります。

そして先生は自分でやったことに対する子どもの反応を感じて先生も成長していくことが必要です。数年同じくりかえしではなく、毎年入園する幼児はちがうのですから保育もちがってこなければならないのは当然でしょう。

常に教師が勉強し研究してこそよい指導ができると思います。

（編集部）

手先の動きと子どもの感情②

清水エミ子

一、心の動きをすなおに表現してくれる手と指

ことばや、顔の表情より早く心を表現してくれるのが指ではないでしょうか。

(イ)転んで、すりきずを作って、起き上がったじゅんいちは「こんなのいたくないよ、へいちゃらだい」といいながら、笑って立ちあがって歩き出したのです。

しかし、手はギュッと握りしめ、げんこつが、固く固くすりむいた足のももにつけられているのです。

(ロ)「この四にんのなかでだれがいちばんつよいかなあ」とけんじがきくと、「ぼくだよ、ぜったいまけないよ」とひでは るは答えたのです。

「そんなら　げんこつでぶたれてもへいきかねえ」とたかみつがつめよりました。

「へいきさ、げんこつなんか、ぼくいしあたまなんだぞ」とひでは るはいいながら、片手で頭をなぜ、笑い顔をしていましたが、片手はいつでも手が出せるように、手の平をひろげて、おなかの前に構えてあったのです。

たかみつが「そんならやってみるぞ」というなりげんこつをふり上げたとたん、ひでは るのかまえていた手が、おでこのへんまで上がっていたのです。手の平は、力を入れてパッとひろげられ

ていたのです。

(ｲ)先生が「これほしい人にあげましょうか」と一枚しかないクレープ紙の端切れを見せた。四、五名の女児が欲しいと手をあげたら、「じゃんけんで、かった人にすれば」とひとりがいった。すると、「あたしそんなのいらない、たいした紙じゃないもの」とみゆきが口をとがらせていったのです。

それで、えつこがもらうことになり、先生がえつこにクレープ紙を渡そうとしたとき、みゆきの手を見ていると、片一方は机の端をしっかり握り、片一方は、何となく先生の方に差し出しているのです。これは、もしかしたら偶然なのかもしれないと思って見ていたのですが、しばらくすると、えつこがその紙をいじっている机に、みゆきも近づいていって、「さわらせて」といっていたので、片方の手が前に出て来たのは、「わたしも欲しい」という心の表われを、ことばや行動より早く表わしていたことがうなずけたのです。

このように、顔の表情、ことばでの表現に加えて手の動き、指の動きを見ていると、子どもたちは、口や行動ではこういっているけれど、本当は、こうなのではないだろうかと、心をよみとる手助けになって行くのです。

みゆきに「あなた、えつこちゃん少しわけてくださいなってたのんでみれば」とことばをかけてみた。すると、えつこが「少しあげる」と良い返事をしてくれたので、みゆきは、にこにこしながら、「これくらいくれる」と、指で欲しい広さを示していたのです。

「だめよ、そんなにいっぱい、このくらいよ」と、えつこにいわれ、みゆきは、手をひっこめ、机によりかかり、胸のところで指をもて遊びながら、えつこが、クレープ紙を切るのをまっていたのです。

それから二人はブランコに乗るにも、帰る仕度をするのにも、いっしょにいたようでした。

二、困ってしまうと、動かなくなる指

いやになったり困ったなと思うと指の方が先に動かなくなったり動きがにぶくなってしまうようです。

(ｲ)「もう残してもいいでしょ」とべそをかきながら、お弁当箱を持って来たので、見るとほんの上面をつっついてあるだけで、ほとんど食べていないのです。

「どうしたの、お腹が痛いの」と聞いてみたが、違うという。ゆっくり話を聞いてみると「あのね、指がくたびれちゃったの」というのです。

「どうしてかしら、ぶつけたの」と聞くと、「ちがうの、きょうこっちの指、朝から動きにくいのよ」といって、反対の左の手

で右の指を、つつみ込んで悲しそうな顔をしたのです。

私はそうかと気づいたので、「お母さんが、朝、右の手で食べなさいといったのね」と、顔をのぞき込むと、「そうなの、でもきょうこっちの右の指、だめなんだもの、くたびれちゃったの」と溜息をついたのです。

この話を聞いていたまわりの子どもたちは、「まちこちゃんこっちの手（右）で食べようとするとき、はしをくるくるくるくるまわしてもってから食べるから、くたびれるんじゃないの」

「よく使えるこっちの手（左）だと、なんにもしないで食べはじめるよ」と、くちぐちにその状態を教えてくれたのです。

左ききを右ききになおしたいお母さんが、幼稚園の門で子どもと別れるとき、「きょうはこっちの手で食べるんですよ」と強くいったので、いやだな、食べにくいな、と思ったとたん、指は動きにくくなり、硬直してしまって、絵を描くのも、何かしてあそぶのも、ぎごちなくなってしまったのです。

こまったな、いやだな、と思うと手がいろいろに反応するようです。

「こっちの手（右手）っていうと、高い所や、低い所や、いろいろの所をもっちゃうの。それで、ここにしようって、あとで決めるんだよ」この子も左ききなのです。入園当初ははさみもよく使えなかったのです。

「あの人のはしの持ち方とってもへん。指がみんなかたく見える。まりちゃんのはへんでないから、やわらかく見えるじゃない。どうしてなの、ぼくのは、どんなに見えるのかなあー」

中指のはしの置き場所をちがえて持って、食べている子のようすを見ていた子が、いっていたことばです。

食べにくいので、緊張して堅くなっているのです。指がいやだといっているので、堅く動きにくくなってしまうのではないでしょうか。

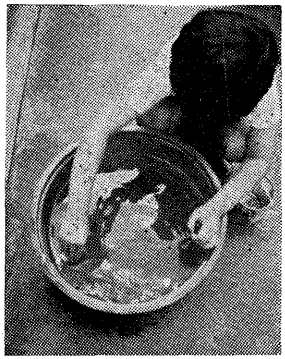
この子の食べ方は、おかずは、はしをブスッとつきさして食べ、ご飯は、口をお弁当箱にくっつけて、かっこみ食べをしているのです。はしがよく動かないからなのです。

㈤　年よりに育てられ、きたないものはさわってはだめだといわれたり、病弱のため、他の子と同じようにかけまわる外遊びの経験も少なくて入園してきた明君は、砂場の砂に指をつっこんだら指がまがらなくなってしまったらしく、片方のあいている手の平で、そっとつつみこんで溜息をついて、すぐに水道で洗っていたのです。

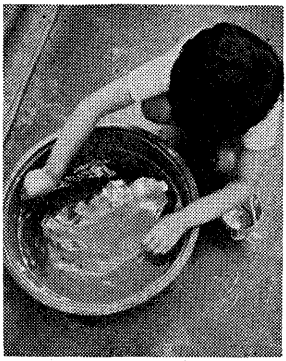
それからは「お砂しない？」とさそっても、「いいのぼくきらい」といって手の指を五本ちゃんと揃えて、体の横でそりかえらせて困っていたのです。

その明君が、プール開きで、どじょうつかみをしたときです。

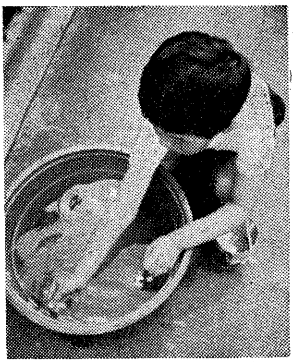
①



②



③



（写真①〜⑨）のようにつかもうとする意志は、強くあるのですがどじょうが、ぬるぬるしていて、気持が悪いので、いやなのです。そのために指がいうことをきかなくなってしまっているのです。

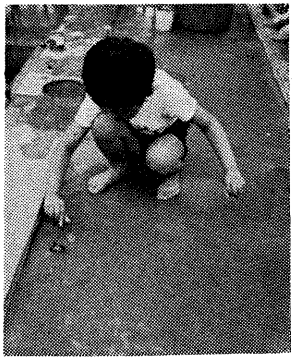
とうとう最後まで、どじょうはつかめずじまいでした。

この明君とどじょうとのふれ合い（指や手）を観察していると、さわらなければと努力する意志の働きより、いやだ、こわい、と思う心の動きの方が指を堅く動かなくしてしまっているようです。

④

⑤

⑥

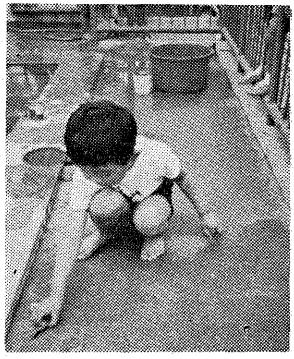


私が明君の手をそっとつつむようにしてどじょうを追いかけても私の手の平の中で、堅くこわばっているのです。

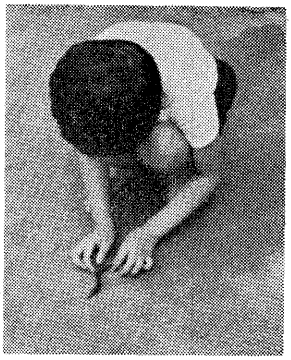
しかし、写真の流れでもわかるように、時間のたつのと、繰り返し指とどじょうをくっつけていくことで、だんだん指の堅さ、いやだという拒否の表情（指や手）は、やわらいでいったのです。

三、活動に使っている手より、活動していない手や指が、心を表わしているようです。

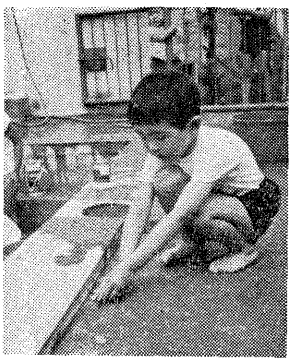
⑦



⑧



⑨

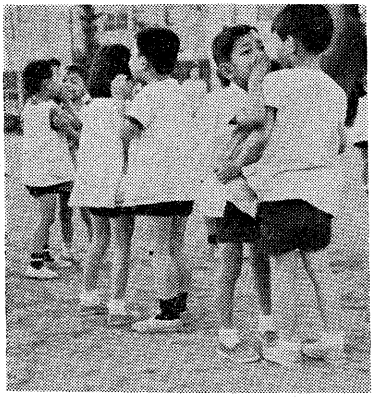


心の動きがあると、両手を活動させていたときでも、片手を止めて片手で表現をしているようです。

(イ) 写真⑩ いもほりにいったいも畑で、友だちが、キチキチバッタをつかまえて私に見せてよろこんでいるのをそばで見ていたちから君（シャベルを胸にあてている子）は、はじめ片手にシャベル、片手にいもを入れる袋を持っていたのです。「つかまえた、こんな大きなバッタ」という友だちの声を聞くと同時に袋をシャベルを持っていた手にうつし、

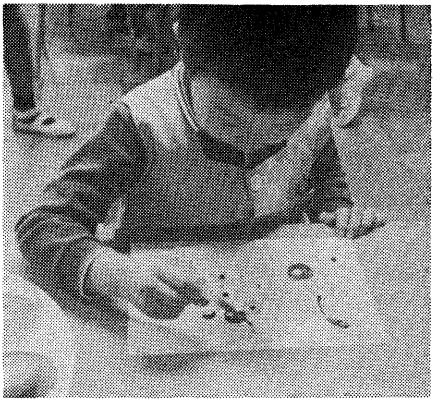
⑩

⑪

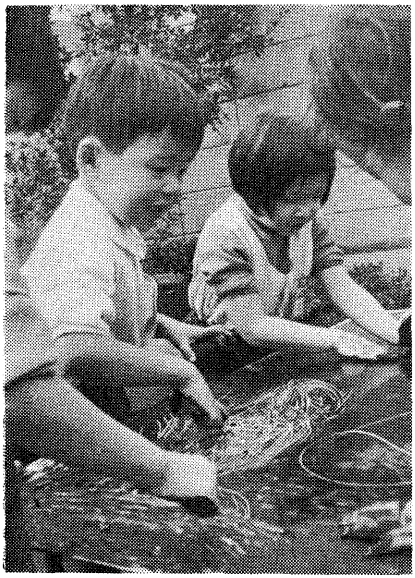


片手の親指をギュッと中指で握りしめてから「あっ、つかまえたかったなあー」といったのです。ほしくてほしくて仕方がない、友だちに先を越されたくやしさを片手で表現していたのです。

(ロ) 写真⑪ 園庭でフォークダンスをしたことのなかった清一君（右の背中をみせている子）は、知らない、今まで交わったことのない友だちとくむようになると、両手を使わなくてはいけないのに、片手で、ギュッと相手の園児服を握りしめてしまっているので



⑫



⑬

す。

この清一君は交友関係の少なさ、交わりのこわさを、片手で相手を握りしめることで表現しているのです。そして片手はリズム表現に使っているのです。ゆっくり動いているのです。

(ハ) 写真⑫は、スポイトで、絵を描いているところです。

「紙をおさえましょう」とも何ともいわないで活動にうつったのですが、片手でしっかり紙と机を握っています。そして、片手でスポイトの頭を、かげんしながら押して、絵具の出かげんを調節しているのです。

はじめての活動の不安が、片手の机の握り方、上から力を入れて、紙といっしょにおさえつけている表情がはっきりわかります。それに比べ、スポイトを持っている指や手は、たいへん楽そうな表情になっていることを、よみとったのです。

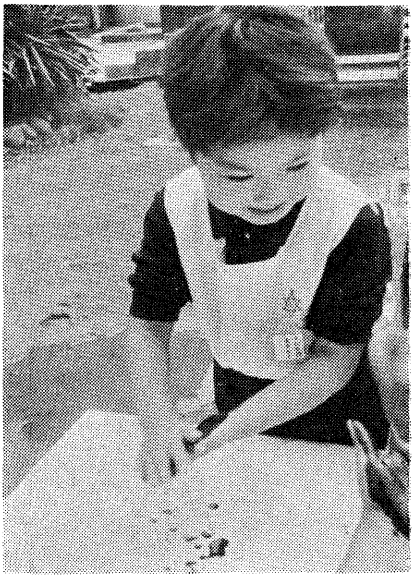
⑬はフィンガーペインティングです。

フィンガーペイントの片手も同じです。

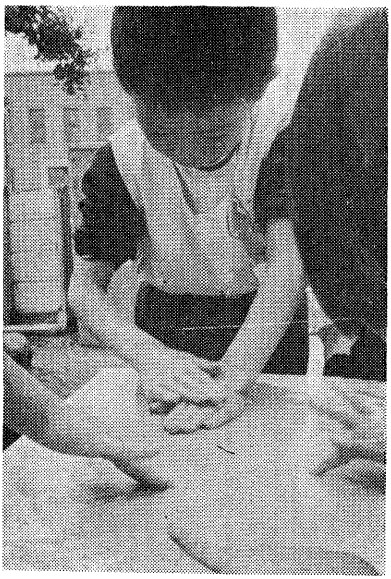
このように、子どもたちの活動をながめるとき、活動している手先や、体全体を見つめるのと同時に、あいている手や指、直接活動をしていないときの手や指の表情を、よみとることを大切にしないと、正しい指導や助言ができないと、つくづく感じさせられたのです。

(動いている手よりあいている方を先に見てから、動かしている活動の手を見ても遅くないと思うのです。かえってその方が、正しく子どもたちの心をよみとることができるといってもよいのではないかとさえ思えるのです)

⑭



⑮



四、安定していくまでに、いろいろの段階を追っていきます。手や指の表情も、心の安定と共に、落着き、楽な表情になって行きます。

(イ)写真⑭～⑯（フィンガーペインティング）

子どもたちは汚れることは好きですが、汚れに入るときにいろいろな心が動くようです。

砂場に自分から進んで飛び込んで行った子どもでも、砂のいじりはじめは、いろいろな表情で、緊張したり、不安がったりしてから、砂にちょう戦していくようになるようです。フィンガーペインティングでもそれと同じことが、はっきり表現されたようです。

はじめは手の先だけ、手の平をそっとのせてみる、のっそりのっそり手を、指を動かしている。

これも、絵具で、手が汚れて行く汚れの度合といっしょに、安心し、積極的に絵具で手を汚すようになっていきます。

手の平や、指だけで足りなくなり、写真⑮のように手の甲にまで、絵具を塗りつけてもう大丈夫だということを表現しています。

他の子どもたちの手より、楽に机の上に指を揃えてのせているのをみてもわかります。写真⑯でもわかるように、汚れの程度

⑯

と、指の緊張の強さが関係していることが表われているようです。

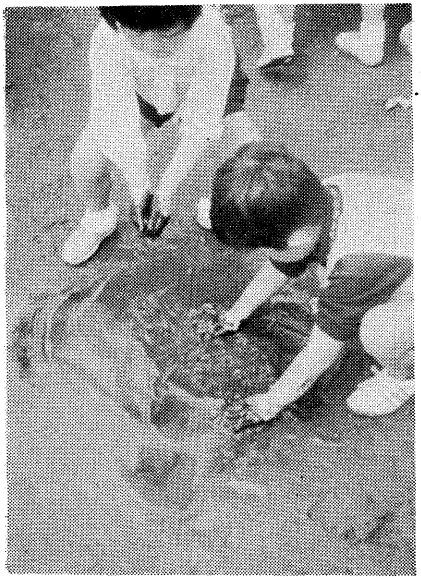
写真⑰⑱をみると、机の上でこちょこちょやっているのではもの足りなくなって、土に水を加えてどろんこをかきまわしだしたのです。

この時は、手全体が、全く満足しきっています。

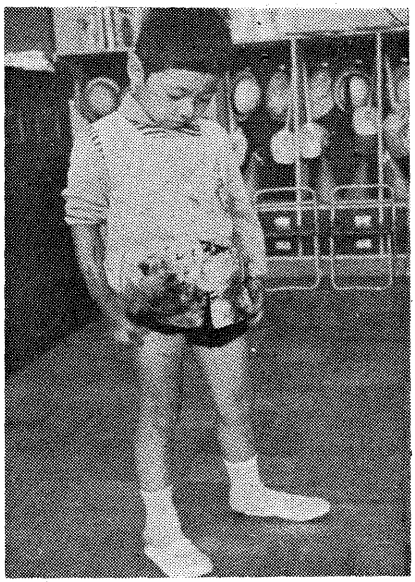
これはあとで、十数名が集まって、どろんこねをはじめていたのです。みな、のびのびゆっくりした表情で、土をかきまわしていました。

⑰

⑱



⑲



土をピチャピチャたたいている時の手首はゴムの手首かと思えるほどのんびりとたたいていたし、はずんでいました。

さて、⑲の写真ですが、遊び終わって、汚してはいけないところが、汚れてしまったことに気づいた時、また、指や手は、少し緊張をはじめます。

このように、子どもたちの指や、手の動きをじっとみていると、「そうかそうか」といっしょにうなずいてあげたくなるように、素直な心のままに表現しているのに驚かされます。

洋服を汚してしまったやすはる君に、「だいじょうぶよ、幼稚園の洋服と取りかえてあげるわよ」と声をかけたとたん、手をパッとひろげて「うん、こんなになっちゃったんだもの、ぼくあらってくるね」と楽な指の表情になっていったのです。

誌面の都合で、女の子の状態を記すことができなかったのですが、男児とは少し違う表現があるようです。やはり手や指の動きだけでも男女差も性格的差も、はっきりわかってくるように思えてきたのです。

しかしまだまだ事例が少ないので、これからもっともっといろいろの場や活動で、子どもたちの手や指を見つめて、心の動きをまちがいなく、つかみとる手だてにしたいと考えます。

よっちゃんと　いっしょにやると　手がくたびれないけど
あのひととやると手がいたくなる。
だから　せんせい　ぼくよっちゃんとくましてよね。

（えいじ）

しらないこと　やりなさいって　せんせいがいうと
ぼく　ゆびがくすぐったくなるよ。
へんなきもちになるの　どうしてかなあ。

（はらだ）

あたし　はいってへんじしようとおもうと
手がすごくおもたいみたいな　へんなきもちになるときある
よ。あんたならない。

（えつこ）

（大田区立蒲田幼稚園）

サンド・プレイ・テクニック（箱庭療法）について ②

秋山達子

ドーラ・M・カルフ夫人

前回はサンド・プレイ・テクニック（箱庭療法）のやり方について大体のことを述べましたので、今回はこの療法の歴史について少し述べたいと思います。

サンド・プレイは英国のローヴェンフェルト夫人によって一九二九年に考案されたものですが、ローヴェンフェルト夫人はこの他にも色タイルを使ったモザイク・テストも考案された英国ではよく知られている心理療法家で、現在でもロンドンで高齢にもかかわらず活躍されています。

サンド・プレイはその後も世界テストや情景テスト、また村テストなどとともに一部の人たちの間で用いられてきましたが、これにユング心理学を導入して新しい解釈を下し、心理療法の一つとして現在用いられている形を確立したのは、スイスのドーラ・M・カルフ夫人です。たまたまこの三月にカルフ夫人は日本に来られて、東京と京都で一般にセミナーを公開されましたので、ここでは主としてカルフ夫人を中心にこの療法についてご紹介しましょう。

カルフ夫人はスイスで生まれましたが、オランダ人と結婚して二児をもうけ、第一次大戦でご主人を亡くされるまではずっとオランダに住んで普通の家庭生活を送っていられた方です。未亡人になられてからまだ幼い二児をかかえてスイスに戻りましたが、それから彼女の勉強と生活への苦闘が

はじまりました。

カルフ夫人の最大の関心事はどうして幼くして父親を失った二人の息子を無事に育て上げていくことができようかということでした。そこから児童心理学を学ぶ熱意が生まれ、現在国際的に臨床心理療法家として知られるカルフ夫人が生まれたのです。

ある時C・G・ユングの一家が避暑地でカルフ夫人に出会いましたが、ユングの子どもたちが彼女のところに遊びにいった後は、いつも満ち足りて楽し気なようすをしているのにユングが気づいて、カルフ夫人に『あなたは将来児童の心理療法家になられるとよいでしょう』とすすめたというエピソードは有名です。

こうしてカルフ夫人は児童の心理に興味を持つようになったのですが、二人の息子が幼かった頃は、カルフ夫人の関心も児童の心理にだけ限られていました。しかし子どもたちが成長するにつれ、同年輩の青年たちの相談にも乗るようになりました。今では上の息子のペーターは大学を卒業して世界の各国を仕事でまわって歩くようになり、下の息子のマルティンはチューリヒ大学の神学部に在籍して宗教学を学ぶようになりましたので、最近では児童の他にも若い社会人や、特に大学生の問題を多く扱っておられます。このようにカルフ夫人の療法は彼女の人生とともに、また子どもたちの成長とともに発展してきたものであり、ここに私たちは全く実際の具体的な生活上の問題に徹した一人の臨床心理家のあり方を見ることができましょう。そしてその経歴から考えても当然のことですが、カルフ夫人の理論は母と子の問題、親子の一体観の上に築きあげられています。

カルフ夫人はユング心理学や東洋学に大きな関心を示していましたが、創立当初のユング研究所で講義を聞いたり、またエンマ・ユング（ユング夫人）に直接指導を受けたりしながら深層心理学の造詣を深めていきました。また子どもをかかえて忙しい毎日の中で英国にも出かけてアンナ・フロイトやローヴェンフェルトの教えも受けました。そしてこのローヴェンフェルトのサンド・プレイ・テクニック（箱庭療法）に使う砂箱や人形も、他の遊戯の道具といっしょにカルフ夫人の小さな遊戯室の中におかれたのですが、子どもたちが特にこれを好んでよく遊ぶことから、だんだんとこの方法に注目するようになったのです。子どもたちはこの砂箱の中に円や角の図形を指で描いたり、人形で形づくったりしました。

またある時は三歳の子どもがカルフ夫人に『もし地球が本当に丸いんだとすると、神さまは世界中の人を見ていられるんだから、神さまってきっと丸いものにちがいないね』などといったりしました。

このようにしてカルフ夫人は、無意識は神話的な主題を持ったイメージとなってあらわれ、特に幾何学的な円や角の図型は世界の種々異なる文化圏において神や神聖なものの表現に用いられている、というユン

グの理論を子どもたちの遊びや言動の中に確認していったのです。

ここで、彼女が今までに扱った多くの事例の発表の許可をいただきましたので、その中から特に現在日本で問題となっている『学校恐怖症』の子どもの事例を借りて、その過程を追いながら、カルフ夫人がサンド・プレイ・テクニック（箱庭療法）の中でこれらの象徴の表現を見出していった跡をたどって、具体的にこの療法について説明を加えたいと思います。

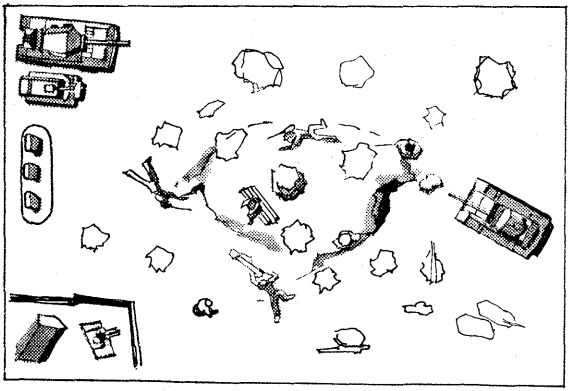
九歳になるクリストフという男の子の例です。彼はチューリヒ近郊の農家の子どもで二歳下の弟と二人で原や畑にかこまれた静かな環境に育ちました。学校に行くようになってから、毎日時間通りに家を出て、午後には予定通りに帰ってくるので家の人は少しも気づかずにいたのですが、学校の先生からの注意で、最近はずる休みをつづけていることがわかり、父親が驚いてカルフ夫人のところに相談にみえたのです。

クリストフは神経質そうに不安に満ちた表情をして父親の後に立っていましたが、カルフ夫人について遊戯室には喜んで入ってきました。

しかし玩具のピストルを見つめながら、『それで遊びたいの』と聞かれても、こわごわと首をかすかに横にふるような内気な子どもでした。カルフ夫人が『お砂遊びをしたことがあるの』と聞くと『よくやったことがあるけれど、僕はもう大きくなったからやらないよ。弟が今よく遊んでいるけれど』ということなので、カルフ夫人は『でもお砂の上に玩具をおいて遊んだことはあるかしら』といいながらたくさんの玩具の車や動物や人形を指してみせました。クリストフはこの考えが気に入ったようで、早速砂箱の遊びにとりかかりました。

はじめに砂箱の真中に大きな丘ができました、そして向こう側がよく見通せるようになるまで注意深くそこにトンネルを掘りました。それから玩具をながめて、家とブランコをえらびブランコの上に男の子を乗せて、砂箱の左下隅におき、柵でまわりをしっかりかこみました。次に丘の頂上に高いポプラの木を置いて、その下にベンチをすえ、もう一人の男の子をすわらせまし

図(一)



た。そこから丘の麓に向かって細い道を指でつけました。それから突然気分を変えてあたりを激しく見まわし、タンクや兵隊や武器をたくさんとりだして、丘のまわりに散開させ、戦争がはじまったのだと宣言しました。兵隊たちは丘をとりかこみ、トンネルを通して機関銃が打たれ、タンクが出動しました。さらに彼は空からも攻撃するように丘の真上に爆撃機を糸でつるすことまで考えました。

遊戯室に入ってきた時はあんなに内気そうだったクリストフは、砂箱の遊びにすっかり夢中になって、最後に爆撃機が正確に丘の真上につるされるまで我を忘れて遊んでいましたが、やがてやっと満足したように全体を眺めて、最後にまた急に思いついたように左のはじにガソリン・スタンドをおいて部屋を出て行き、父親に向かって誇らし気にその作品を見てくれるようにと告げました。（図(一)参照）

この砂箱の柵にかこまれた左下隅は、家やブランコのある平和な家庭の情景で、彼の落着いていられる唯一の場所なのでしょう。そして中央の木の下にいるもう一人の男の子は外の世界を見下ろしている彼自身のことでしょう。木は世界の多くの神話やお伽話の中で生命の木と呼ばれて、大地に根をはって空に向かってすくすくと生長するものであり、天と地を結ぶ統合を意味して、創造力や独立心をあらわすものとされていますが、同時に木は花を咲かせて実を結んで人々に甘い果実を与え、その下に憩う人を保護し養う意味を持っています。この子どもは木の下で休みながらその保護の下に自分を育てて、いずれはポプラの木そのもののようにすくすくと育っていくはずなのです。しかし麓では戦争がはじまって、丘は兵隊にとりかこまれ、空からは爆弾も落ちてきそうです。この砂箱の構図から見ると、外の世界は彼にとってまわり中敵にかこまれた恐しいところのようです。だから彼は左下隅の家に閉じこもって柵を開こうともせず、学校もしばしば休みがちになってしまうのです。カルフ夫人にはこの丘がなんとなく妊娠中の母親のおなかのようにも思えたので、何かその辺に問題があるのではないかと、母親の話を聞いてみることにしました。

クリストフの母親は農家の娘でしたが、小さい時からすぐおなかが痛いといってあまり働かなかったので皆からは怠けものと思われていました。この持病は結婚してもつづいて妊娠を不安に感ずるようになりましたが、医者にはどこが悪いのか理由が見出せませんでした。それで彼女は出産を非常に恐れていましたが、クリストフは安産でその点は問題ありませんでした。しかし彼女は出産の恐怖から、この生まれでた子どもをあまりかわいいとは思えず、よく面倒も見ませんでした。このような状況ではもちろんクリストフが母親について安心感を持つこともできなかったでしょうし、また母親の持った恐怖感が無意識のうちに子

どもに伝わっているのであろうことも考えられました。

クリストフはこうして内気でひよわな子どもに育ちましたが、入学前にはヘルニアの手術をするようになり、その後は余計に神経質になって、夜は二階の部屋で一人で寝ることまでこわがるようになりました。二年の時に受持ちが変わって厳しく粗暴な先生につくことになったこともこの傾向を強めて、時々学校を勝手に休むようになり、またこの頃から家の中で小さな盗みがはじまって、特にあめとかチョコレートなどの甘いものを母親にかくれて持ち出すようになりました。クリストフが外の世界で勇気を持って生きていくのには、甘くやさしい母親の保護を必要としていることは確かでした。

この砂箱の中のポプラの木の下にいる男の子は、そこに茂った葉で彼を保護してくれる象徴的な母親を求めていると同時に、外界の敵を恐れながらも、なんとかして育っていこうとする生命力をもあらわしているように考えられ、その上、最後に左はじにおいたガソリン・スタンドは、無意識の中に貯えられているエネルギーの供給源を意味しているようで、カルフ夫人にはこの砂箱の構図は将来への希望を秘めたもののように思えました。

その次の時は、はじめからクリストフは安心してカルフ夫人とお店屋さんごっこをしました。カルフ夫人が八百屋さんになって、彼はオレンジをたくさん買いました。オレンジは甘い果実と種子を持つ明るい色をした球形です。それは彼の無意識の中にひそんでいる生命力をあらわしているようにも思えました。こんな遊びが繰り返されていたある日、彼は考えを変えて、お店に買物に行くかわりに襲撃をしました。カルフ夫人はおまわりさんになって、広い家中を隠れている彼を探して歩く役になりました。こうしてお買物遊びはかくれんぼに変わりましたが、クリストフはきっと、無意識の中に隠れていてまだ見出されていない本当の自分を見つけて欲しかったのかもしれません。また父親の絵を描くのだといって黒板に描かれた姿は、隅の方にちぢこまっている小さい人でした。これはまだ芽を出したばかりの彼自身の小さな自我をあらわしていたのかもしれません。

一ヵ月後に、再び砂箱の作品が作られましたが、今度はやはり中央の丘の上に男の子が休んでいましたけれども、その下に町ができました。しかし町は急に戦場に変わってしまって大混乱となり、汽車や自動車は丘につきささって脱線してしまいました。その後しばらくの間、クリストフは雷管のついた玩具のピストルに夢中になっていました。はじめは大きな音をこわがって部屋の隅で耳をふさぎながらカルフ夫人にピストルを打たせていましたが、そのうち自分でもやれるようになり、だんだん大きな音をさせたがるようになって、しまいには地下室に行って石の床にむかって数え切

れないほど何回も爆発音をこだまさせながら打ちまくりました。大きな音がすればするほど彼は嬉しそうでした。

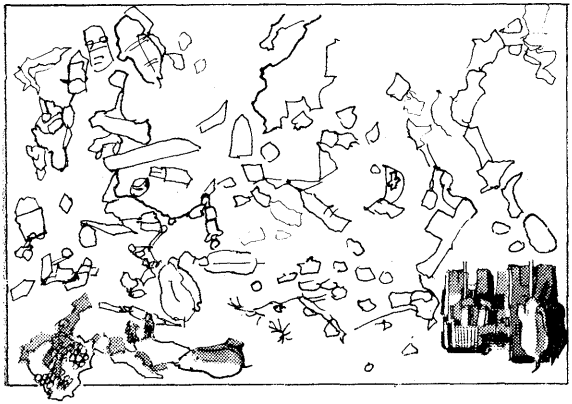
それから四ヵ月後にまた砂箱の作品ができましたが、今度は砂の上で何台もの車を動かして遊ぶだけで、特に作品ともいえないものでした。しかしカルフ夫人には心の一隅でやっとせきとめられていたエネルギーが動きはじめたように思われました。また黒板をいっぱいに使ってスーキャーが山を滑り降りるところの絵を描きました。そのまわりにおおぜいの人が見物していましたが、この画面からは、クリストフがいよいよ丘から降りて戦いの行なわれていた世界に直面しようとしているようで、彼の並並ならぬ決心が感じられるようでした。

しかしスキーのシュプールはまだ浅く、弱々しい線で描かれていて、この子どもの出発にあたっては細心の注意と保護が必要と思われました。そこでカルフ夫人はその次の時間にはどんな発展があるだろうかと期待を持って待つことにしました。

一週間たち再びカルフ夫人を訪れたクリストフは青白な顔をしておびえた表情を浮べていました。一体この子に何が起きたのでしょうか。『どうしたの』というカルフ夫人の問いに、クリストフは『こわいことがあったの』といって少しずつ説明をはじめました。クリストフはカルフ夫人のところまで来るのに短い区間ですが汽車に乗るのです。その日来る時に郵便車に手紙の袋を運んでいた郵便屋さんが、汽車が動きはじめた時にステップから落ちてしまったのだそうです。大したこともなくて郵便屋さんは無事でしたが、こんな小さな事件でも育ちはじめたばかりの傷つきやすいクリストフの心に衝撃を与えるには十分でした。彼がすっかり混乱してもとの状態に戻ってしまったことは、まだ興奮がすっかりさめきらないうちに作りはじめた砂箱の構図にも、はっきりとあらわれていました。

クリストフはいろいろなものを無差別にとり出して砂箱の中におきました。タンクも兵隊も家畜も猛獣もでたらめに砂箱の中にぎっしりと並べられ、その真中で汽車が転覆していました。クリストフは『こんな世界には住みたくないな』とつけ加えましたが、これはまるで分裂病の人の作ったも

図(二)



のようでした。カルフ夫人はその中に何か希望の持てそうなものはないかと探しましたが、砂箱の左手の下に小さな池があり、子どもと一人の女性がこの混乱した情景に背を向けてすわっていました。傍には花の咲いた木があり、象が一匹池から水を飲んでいました。（図(二)参照）

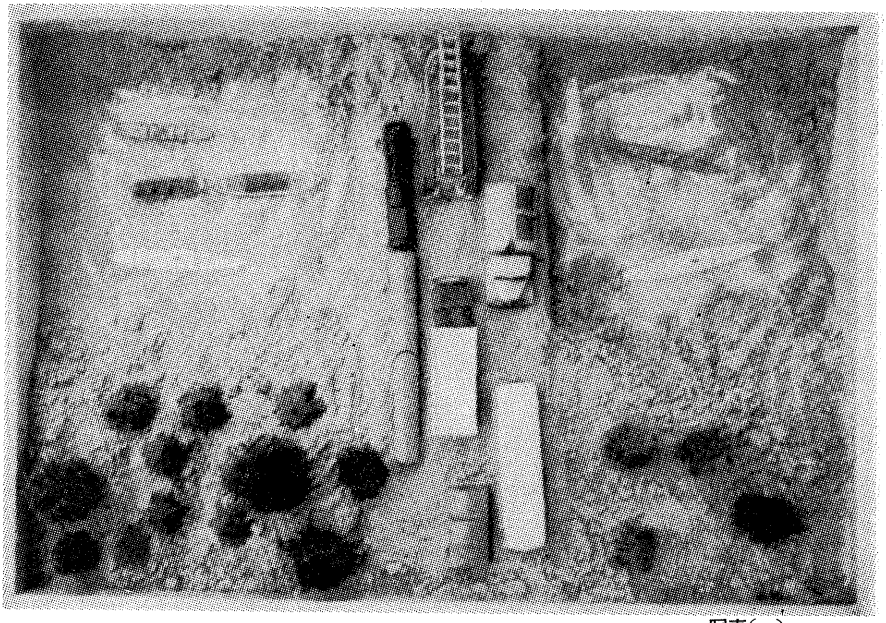
クリストフはこの混乱した世界に背を向けてカルフ夫人との治療の場面と思われる静かな憩いの場面を作り、無意識の中の生命力の溢れる泉の傍に、生長の過程をあらわす花の咲く木をおき、重い荷を背負って人間の仕事を手伝う象も加えたのです。クリストフはこの大混乱から脱出する可能性を示す力の存在の憩の場所を、何気なく砂箱の左下隅に作っていたのです。しかしまだ外の混乱は当分の間つづきそうでした。

その頃受持ちの先生からクリストフが毎日学校に来られるようになったとの報告がありましたが、まだ他の子どもたちとはうまく遊べず学業も遅れているので特殊学級に入れるとのことでした。しかしカルフ夫人はやっと自信を持ちはじめた子どもの心が傷つくことを心配して、学級を変えることはもう少し待ってもらうようにと先生に頼みました。

その後しばらくの間、クリストフは壊れた電気機関車の修理に熱中していました。そして解体をしたり部品をとりかえたりしたりしていましたが、そのうちどうやら汽車が動くようになりました。カルフ夫人は電気のことはよくわからなかったので、レールを組みたてて電気機関車を走らせる遊びでは、彼が主導権をとり、カルフ夫人は助手になりましたが、これはクリストフに自信を与えるのに大いに役立ったようです。ここで彼は自分が教えるという指導者としての役割を学びました。

五週間も熱心に汽車で遊んだ後で、カルフ夫人はまた砂箱で遊ぶことをすすめてみました。クリストフはすぐ賛成して、今度は大きな河の上にかかる橋と広い道路を作りました。河には船が左右の両方向にすすんでいました。橋の上には汽車や自動車が往来していました。よく見ると手前の森の方から消防車とパトカーが向こうの火事や混乱を静めるために走って行きます。清掃車がゴミをかき集めて戻ってくるところです。水上でも陸でも車や船が左右、上下に行き来して意識と無意識、外界と内界の間を結ぶつながりができてきたことがよくわかります。手前の森であらわされている無意識の暗い茂みの中から新しいエネルギーが現われ、健康な心の働きがはじまっていることをカルフ夫人は悟りました。（写真(一)参照）

今では電気のことにすっかり詳しくなったクリストフにカルフ夫人は、お人形の家に豆電球をとりつける仕事を依頼しました。そして大変な努力の末に三階建のお人形の家には明りがつきました。家は心をあらわします、そしてその中に明りがともったのです。これを見た時のクリストフの喜



写真(一)

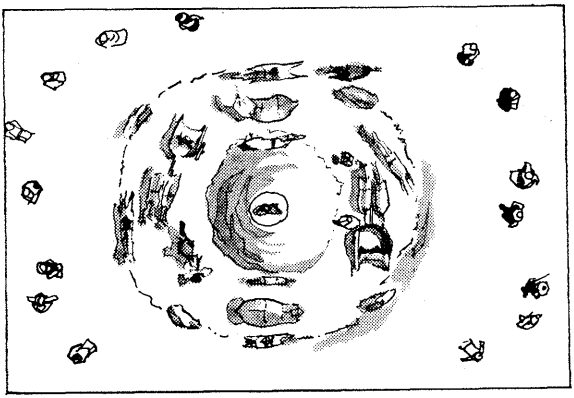
びは、エディソンが電灯を発明した時以上のものがあったかもしれません。そしてこれがきっかけとなって次の箱庭の作品には更に発展が見られました。

今度も砂箱の真中に小高い丘がありましたが、一人の人がすわってハーモニカを吹いていました。そして丘の下には左右にまわるサーカスの情景が作られ、象や虎や馬や戦車を馳るローマ人や道化やアクロバットの人形がおかれて、観客は砂箱の両側にわかれて行儀よく見ていました。(図(三)参照)

サーカスはラテン語のチルクスからきた言葉で、もともとはギリシャで『輪』や『円』をあらわしていました。前回に橋と河で十字の図型を作った彼は、今度は音楽家を中心に円型に輪を描く図型に変わりました。カルフ夫人はこのような図型が砂箱の作品にあらわれてくることを、中心核の形成と呼んでいます。児童は普通、母親との未分化の世界から二、三歳頃までには自己の中心を形成してその上に自我を育てていくのですが、この砂箱の中の無邪気な遊びの中でクリストフが象徴的に表現しているものは、遅ればせながら自分の中心を見いだして、その上に健康な自我を育てて行こうとする努力です。

こうしてクリストフは自己の成長の基盤を作りあげ、その後も砂箱や粘土の作品にその後の順調な成長の跡を残しながら育っていったのですが、あまり長くなるので、この事例の紹介はこの辺

図(三)



で終わりにいたします。

カルフ夫人は現在でもスイスのチューリヒ市の郊外のゾリコン村で、ヒンダーツューネンと呼ばれる十五世紀から建っているお伽話の中にでも出てくるような古い家に住んで、このような療法をつづけています。最近では、小さかった遊戯室も広げられて、世界の各国からこの療法を教わるためにお弟子さんたちが集まるようになりました。

この事例でもよくあらわれているようにサンド・プレイ・テクニック（箱庭療法）が学校恐怖症や児童の情緒障害の治療にあげる効果は大きなものですが、それと同時にカルフ夫人の心理療法家としての真価は、母性愛にあふれる人格と子どもたちにさしのべる母性的な保護と励ましの心にあると思います。カルフ夫人は一九六六年に、それまで扱われた多くの事例を集めて『ザンド・シュピール』（砂遊び）という本を書いてこの療法を世界に発表されましたが、この本は彼女の最愛の二人の息子ペーターとマルティンに捧げられたものです

外国のことはこの位にして、次回は日本におけるサンド・プレイ・テクニック（箱庭療法）についてお話しします。

お知らせ

これまで毎年六月に開いてきた「**幼児教育実際指導研究会**」は、時期が適当でないと考えた結果、六月に行なわないで、秋に行なうことにしました。秋に行なう「幼児教育実際指導研究会」の詳細については、きまり次第、追って本誌上に掲載します。

お茶の水女子大学附属幼稚園内
幼児教育研究会

幼児教育講習会予告

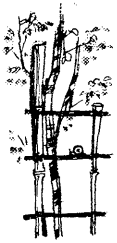
日時 昭和45年7月22日（水）～25日（土）

会場 お茶の水女子大学
講堂・体育館

主催 お茶の水女子大学
附属幼稚園内
日本幼稚園協会

ヨーロッパの旅（三）

平井信義



ストックホルムでの楽しい思い出は、十五年前にさかのぼる。それは、スカンセンという丘での一夕であった。その丘は、一帯に遊園地になっていたが、北欧における古代から近代までの住宅が、丘陵のそこここに建てられており、歴史的な住宅の移り変わりが、視覚を通じて認識されるようになっていた。また、丘の頂上には広場があって、そこには小さな舞台が作られてもいた。

八月の北欧は、まだまだ昼が長い。午後の六時になっても七時になっても、太陽は高く輝いていた。私がスカンセンの坂道を登り始めたのは、夕飯をすませてからであったから、七時過ぎではなかったかと思う。色とりどりの民族衣裳を身につけのぼっていく人々の群をさけて、私は裏手に通ずる道を選んで歩いていった。そこからは、ストックホルムの町並や塔、そして海が、手にとるように見えた。古くはないが、静かな落ちついた都会の趣が屋根から屋根へと伝わって、私の胸に通じてくるように思えた。

ヨーロッパの旅で、このように人々から隔絶されて、一人になってみると、言い知れぬ感情のみがわいてくることがある。そして、いつの間にか眼に涙がたまって、それが頬を伝ったり、或いは頬笑みが浮んでくる。このような感情がなぜわいてくるのであろうか。異郷という言葉が浮んでくる。郷愁という言葉がきこえてくる。それが、何を意味しているのであろうか。私は、近くの木の葉をむしって、口にくわえる。そうしてわいてきた感情をもてあましてしまうのであった。

そろそろと歩みをのばしながら、わずかばかりの林を通り抜けると、丘の斜面がひらけ、そこには、いくつもの小さな掘立て小屋が並んでいた。十平方メートルぐらいの区画が次々と区切られ

ていて、そこに、私の背丈ぐらいの小さな小屋が、それも一つ一つが皆ちがったデザインで建てられていた。何だろう——といぶかしく思いながら近づいてみると、私の足音に気づいたのか、小屋の小さい窓から一人の男の子が顔を出した。十歳前後のあどけない顔に微笑をたたえ、「寄って、お茶をのんでいきませんか？」と、英語で誘った。それは、子どもの住宅だったのである。私も微笑を返しながら、喜んでそれに応じ、ようやく背をかがめて通らなければ入れないような入口から、中に入った。

三畳ほどの部屋であったが、中には棚があって、そこに大工道具などがのせてあった。小さな机の上には、お茶の道具が一式あって、魔法瓶からお湯を注げば、紅茶をいれることができるようになっていた。その子どもは、ちょうど、カーテンを作っているところで、ピンクの布ぎれの端から糸がたれていて、その先に針がついていた。

「この家は……」と、その少年がいった。「私自身で作ったのです。前もって頼んでおくと、家を建てる権利が得られるのです。そして、材木や釘や大工道具など、すべて貸してくれるのです。家をどのように建てるかは、ぼくのプランにまかせられるのです」その少年の青い眼は、輝いていた。

「とても快適ですね。ここへ泊ることもあるのですか？」

「残念ながら、そのスペースはありません。これだけの広さですから……。ただ、このそばを通るお客さんを招待するのが楽しいのです。あなたは、どこの国の人ですか？」

「私は日本人です。一年ほど西ドイツで医学を勉強していたのですが、いま、帰国をする途次に、この美しい国に立ち寄ったところです」

「日本については、富士山の写真をみたことがあります。非常に美しかった。たしか、雑誌だったと思います」

それ以上は、日本についての知識を持っていないようであった。私は、鞄の中から、小さなコケシの人形を取り出した。いつも世話になった人にお礼としてあげることにしている品である。

「これを、今日の招待のお礼にあげましょう。日本独特の人形で、コケシといいます」

「コケシ？　このノートに書いて下さい。日本字でも書いて下さるとありがたいのですが……」

私は「日本」と書いて、日という字が太陽からの象形文字であることを説明した。その少年はコケシを手にした時から、まるい眼をいっそうくりくりさせて、私の顔を見、私の書く文字を見、そしてまた、私の顔を見た。その顔は、今日でもはっきりとよみがえってくる。何年たっても、忘れ得ぬあどけない顔である。

あれから十五年たったから、彼はもう立派な青年になっているはずである。どのような青年になっているであろうか。恐らく

あの頃の童顔は消え、会っても全く判別することはできないであろう。私も、あの頃はふさふさした真黒の髪の毛をしていたが、今はびんが白くなり、頭頂の毛はうすくなっているから、彼と会ったとしても、その時の私であることは気づかないであろう。今回の滞在でも、万々一の奇遇があるかも知れないと、カフェに坐って人通りを眺める時にも、町を歩いている時にも、しばしばその子どもの顔を思い浮べていたが、奇遇は遂に訪れなかった。人生とは、そのようなことが多いものである。

お茶を一杯のんでから、私はその小屋を出た。窓から顔を出したその少年は、右手にしっかりとコケシを握って高くかざしながら、何回となく、「ありがとう」といった。私が再び林の中に影を消すまで、彼は顔を出していた。私も、何回か手を振っては、別れを惜しんだ。

今回の滞在では、最早、シーズンが過ぎていて、小学校も始まっていた。一つだけ子どもの小屋が残っていたが、それも半分は解体されたままになっていた。ひそかに、新しい少年とのめぐりあいを期待していたのであったが、それも果たされなかった。

再び、十五年前の思い出に帰る。林の中の小道を上へ上へと登っていくと、次第に人々の動きが目立ってきた。そして、頂上の広場に出ると、そこには、舞台を中心にして円形に大勢の人々が集まっていた。女の人の衣裳は、胸にふくらみを持ちスカートのひだの多い北欧の晴着であり、その色は年齢にふさわしくはでなものやしぶいものがあった。男の人々は、チロルハットに似た帽子をかぶり、ニッカーズボンをはき、ベルトをしている者が多かった。

拍手に迎えられて、楽隊が来た。そして、舞台の脇にある楽隊用の小さい囲いの中に入った。間もなく、一声高く吹奏が行なわれ、引続いて軽いミュージカルが流れ出すと、待ちかねたように幾組もの男女が腕を組んで舞台にのぼり、くるくると廻るように踊りはじめた。ヨーデルも入る。足ぶみも入る。みなにこにこして、楽しそうであった。一曲終ると拍手が起き、舞台の上の人々はホッとしたようにただずむが、引続いて曲が始まると再び熱狂的に踊った。私自身も、その渦の中に入って、踊り狂ってみたいほどの楽しいふんい気であった。そのようにふんい気にひたりながら、時のたつのも忘れていたが、ようやくあたりがたそがれ始めたので、時計をみると、すでに十一時になっていた。まだまだ続くであろう踊りの渦、あるいは明方まで踊り続けるのかも知れない——そうした人々の群を背にして、私は一人、夕陽の沈む方に向かって坂道をおり、背の高い叢を背にして芝地に腰をおろした。遙かに楽隊の奏でる音楽がきこえてきた。

夕陽は、どんどんと沈んでいく。赤くはあったがあまり大きくならない夕陽であった。時々、風にゆらめくように、最後の陽の

光をかざしながら、西の低い丘に下の部分をかくし始めると、容赦もなくどんどんと姿を消してしまった。あとには、黒みがかった夕焼空が残り、それもやがて消えた。十一時半になっていた。あと二時間もすると、再び日の出である。はかない北欧の夜空を仰ぎ、満天に輝き出した星の群を見ながら、歩いてパンシオンに戻ったのであった。

今回の旅でスカンセンを訪れたのは、日曜の午前であった。広場にはすでに幾組かの子ども連れの家族が来ていて、広場を一周する豆汽車にのりこみ、私の方に手を振りながら団欒を楽しんでいた。また、前の時には見なかった小さな池があり、そこに群がっている水鳥にパン屑をやっている家族連れもあった。私が夕陽をみながら坐った場所ははっきりはしなかったが、そのあたりをあちこちと散策している間に、何匹ものリスが走り寄ってきて私の顔を見上げ、餌を与えるようすがないとわかると、慌てるようにして叢の方へ走っていった。何か餌をもってきていなかったかと、私がポケットを探っているあいだ、私の手もとをみながら鼻をうごかし、手をしごいているリスもいた。しかしポケットから出した手に何もないとわかると、そのリスも走り去っていった。

スカンセンの入口から右手の坂をのぼると、新しく水族館ができていた。その左隣りに、これも前にはなかったと思われるが、子どもの遊び場ができていた。簡単な雨天体操場のような建物があり、その中で十数人の子どもたちがはしゃいでいた。

よくみると、すべてががらくたであった。廃物利用——というわけである。古い自動車が一台おかれているほか、枯れた二本の大木の間に綱が渡してある部分と、大きな網が天井から床に届くばかりにつってあり、その中に合成樹脂のスポンジが大小、それもさまざまな形で投げ込まれてある部分とがあった。子どもたちはその網に集中していた。小学生ぐらいの女の子も男の子もおり、幼児もその中にまざっていた。

網目のところに手をかけ足をかけて、高みまでよじのぼる。高い天井まで手の届く高さにのぼっている子どももあった。子どもたちは、自分の力量に応じて高いところまでよじのぼり、そこからスポンジめがけて飛びおりるのである。スポンジの弾力にはねかえされて、再びいい加減の高さの宙に飛び上る。また落ちる。何回かそれがくり返されていくうちに、遂にはスポンジの間に深く身を埋めることになる。そこから再びはいあがって、網を伝わって、高いところにのぼる。そして、飛びおりるのである。そのようなことを、何回も何回もあきずにやっている。私自身も、思わず、いっしょになってそれをやってみたい衝動にかられたほどである。四〜五歳の男の子は、まだ高いところにのぼる勇気がなく、低いところから飛んでは、スポンジとスポンジの間に深く沈み、そこからきゃっきゃっといいながら出てくるのであった。

太い綱を渡っている子どもがあった。高さ二メートルぐらいのところに斜めに張ってあったが、その下には同じスポンジが敷きつめてあるので、落ちても痛くない。いたずらそうな女の子が、わざとあぶなっかしい身振りをして、下におちてみせた。スポンジの弾力がその子をはね返し、二〜三回飛んでみせてから、床の上におりてきた。

このような子どもの遊びをみていると、際限がない。目を輝かし、からだを張って遊んでいる子どもの姿は、見事である。子どもたちに、このような遊びの機会を与えるにはどうしたらよいであろうか。廃物を利用して、このような遊びが実現される、——その着想に感心した。子どもの心の躍動を知っている者のみが、このような遊び場のくふうをすることができる。わが国の遊園地にくふうされているさまざまな乗物が、この遊び場におかれているものにくらべ、子どもの心の躍動にどれだけ役に立っているであろうか。このスカンセンにも、広場ではモーターで走る豆汽車が家族をのせてぐるぐる回っていたし、子どもたちの笑顔も見られた。しかし、がらくたのある遊び場での遊びの方が、子どもの心にぴったりとしたものではなかろうか。網の中からでてきた女の子は顔は紅潮し、呼吸ははずみ、汗をびっしょりとかいていた。

丘をおりると、一団の小学生の女の子に会った。女の先生に引率されて、博物館からでてきたところであった。にぎやかに話をしながら、私が立っている方へと歩いてくる。とりどりの洋服を着ていた。みると、若い女の先生の服装は全くのミニスカートである。膝上二十センチにも及んでいただろうか。その上、子どもたちの半数がミニスカートなのである。私は、いよいよこのようなスタイルが、すべての年齢層に及ぶことを思った。しかし、ふと思い返してみると、もともと小学校の女の子のスカートは短かったはずである。女の子たちがミニスカートであるのは当り前で、女の先生からの連想が、年齢を超えてしまったことになる。おとなが子どものようになってきたのだ——と思うと、何だかひとりでおかしくなって、くっくっと笑いがこみ上げてきた。子どもがおとなの流行にそまってきたのではなく、おとなが子どものまねをし始めたのだ——それが本当かどうかはわからないけれど、子どもがおとなになり、おとなが子どもになる、おとなが子どもになり、子どもがおとなになる——という言葉が頭の中でぐるぐる回転し始めて、ひとりでおかしくなってしまった。いったい、このような言葉の回転は、何を意味しているのであろうか。

そのような私にはおかまいなしに、一団は私の側をさっさと通りすぎると、別の大きな建物の脇をまがって、姿を消してしまった。私は、大木の茂る林の中の自動車道に沿って走る歩道を歩きながら、人通りもまばらな日曜日の昼近くを、とぼとぼと歩いて町の方に戻っていった。

問題行動の研究(二)

児玉省

先月号の㈠では子どもの問題行動の意味について筆者の考えを明らかにし、次いで問題行動に関するアメリカの三つの研究を取りあげてその研究者たちが見出した問題行動の種類を叙述し、あわせてその展開に関する見解を披露したが、本稿㈡においては、さらにもう一つのアメリカの研究を取りあげ、引きつづき、日本の三人の医学者による研究を取りあげることにする。そして、これらの研究者たちの見解の一致点と不一致点を考察し、問題の所在点と性格を明らかにしたいと願うものである。

D、マクファレンほかの研究

(J. W. Macfarlane et al : A Developmental Study of the Behavior Problems of Normal Children. 1954)

加州大学児童相談所のマクファレンほかは、二十二ヵ月から十四歳までの期間にわたって二五二名の児童の身体、精神並びに性格の発達的研究を行なった。この種の追跡研究としては、フエルス研究所の誕生から三十年以上に亘る研究があるが、これは特に問題行動をテーマとしていないのに比べて、正常児の問題行動を主要テーマとしているところに、本文とは特に関係のある研究である。

問題行動を生物的機能の樹立に関係のあるもの（睡眠、排泄食事、性など）身体運動関係（チック、指をすう、爪をかむ、多動性など）社会的基準関係（嘘言、家出、放浪、盗み、破壊性などいわゆる反社会的なもの）性格関係（わがまま、けんか、過依存、過敏性、はずかしがり、恐怖、いらいら、かんしゃく発作、嫉妬など）の四種類に分けて、その年齢的変化を追い、かつ性別差を検討しているが、そのうち主なものを取りあ

げてみる。

1　生物的機能関係

不眠は一歳の時の男女、それぞれ四〇％未満から減少して、十歳から十一歳で再び盛り返して、男女が二〇％余から一五％くらいまで、次いで減少。

昼尿は男児は六％、女児は八％で消滅。**夜尿**は男女児とも五―六歳で一〇％前後、以後男児はそのまま十四歳まで継続、女児は十三歳で消滅する。

食欲不振は男女児とも四―六歳で三〇％前後でピーク。その後漸減して、十三―十四歳で消滅する。

2　身体運動関係

チックや多動性は、男女児とも六―七歳ごろ一〇％でピークであるが、その後減少して、女は十歳、男は十一歳で消滅。**爪をかむ**は男女児とも三歳で一〇％前後、そのあと漸増して十一歳で三〇％前後、それから減っていくが、十四歳でまだ二〇％以上残っている。これに対して**指をすう**は、女児は三歳で三〇余％、男児は二〇余％から年齢とともに漸減し、十二―十三歳で消滅する。**超活動性**は、四―五歳のところがピークで、男児が四五％前後、女児が三〇余％、それから漸減し、女児は十三歳で消滅、男児は十四歳でまだ一〇余％残っている。

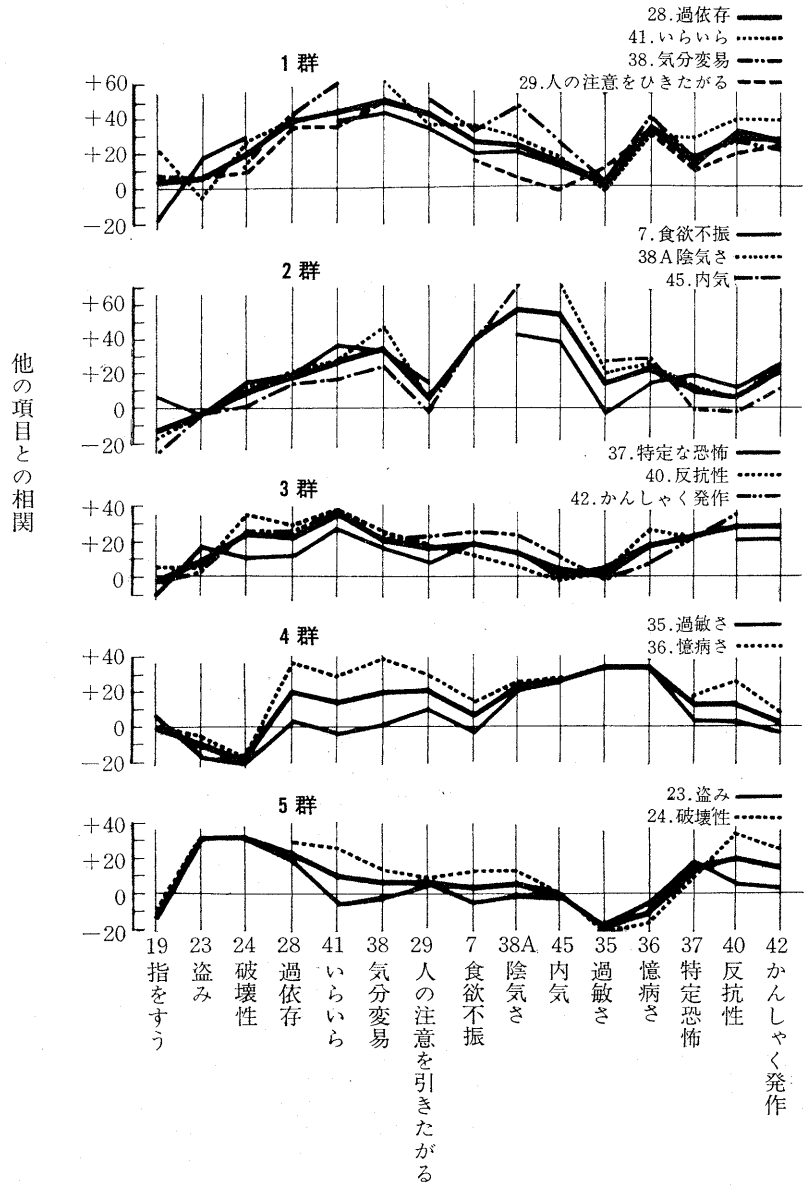
3　社会的基準関係

嘘言は四―六歳がピークで五〇％前後、それから一度減って八歳で男児が四〇％位、その後漸減して、十四歳で一〇％未満になる。女児は、九歳で約二〇％、十一歳で清算する。**盗み**は男女児とも三歳がピークであるが、この時分の人の物をとるのを盗みと呼ぶことは不適当と思われるので、五歳のところをみると、男児の場合一〇％、女児四％。男児は七歳、八歳と九％、九歳で六％、その後母親の報告では消滅しているが、学校の報告では十四歳でもまだ多少この問題が残存している。他方女児は八歳で五％、その後消滅したようになっているが、これも十四歳で学校側の報告では、まだ残っている。**破壊性**は三歳で男女児同率の二〇％であるが、女児はそれから漸減して十三歳で消滅、男児は五歳で三〇％未満でピーク、八歳が第二のピークで二〇％、それから減少して女児同様十三歳で消滅する。**家出・放浪**は男女児とも三歳で現われるが、七歳では消滅している。

4　性格関係

超依存性は、男児が四歳でピークで約二五％、それから減少しながらも起伏を示し、十四歳で一〇余％残存。女児は五歳以後男児を陵駕し、七歳と十一歳がピークで二五％前後、十歳で依然約一〇％残っている。**過敏性**は女児が四―六歳がピークで五〇余％、その後起伏を示しながら十四歳で再び五〇％余、男

問題行動間の相関（五歳時）



児は十—十一歳がピークで約六〇%、それから急減して十四歳で二〇%弱になる。**特定の事物に対する恐怖**は、三—四歳の頃は六〇%弱から七〇%弱、それから男女児とも減少して十一歳で再び第二のピークを迎え、その後十四歳で女児は二〇%、男児は約五%の残存を示す。**反抗性**は三—五歳頃がピークで四〇%—三〇%の線にあり、その後男児は十—十一歳が第二のピークで約二〇%、女児は七歳からうんと減って、だいたい一〇%の線を十四歳まで維持する。**いらいらする**は男女児とも四歳がピークで二〇余%、それからは多少減少しながら起伏を示し十四歳まで継続する。**かんしゃく発作**は、男女児とも三歳がピークで六〇余%から七〇%弱、それから両性とも漸減しながら十四歳で男児は約二五%、女児が一〇%で続いている。

問題行動間の相関

マクファレンらは、問題行動の間に、何らかの関連がないかを見るために五歳の時に、これらの問題行動の間に相関を求めたところ五歳のところで前ページの図のような結果を得た。これによると、五つの行動群（クラスター）が現われたわけで、これから次のような性格像があることが想定できるわけである。

第一群は、過依存性、いらいらしさ、気分が変わり易い、人の注意をひきたがる——こういう問題行動がいっしょになる可能性が多い。いわゆるヒステリー的性格の傾向がある。

第二群は、食欲不振、陰気さ、はずかしがりの結びつきである。

第三群は、恐怖、反抗性、かんしゃく発作の結びつき。

第四群は過敏性、臆病さ。

第五群は盗み、破壊性、反抗性、かんしゃく発作、恐怖の結びつきであって、幼児期における反社会的傾向を暗示するものである。

日本の研究で取り上げるものは、筆者を除きいずれも医学者であるが、これはとくに医学者だけを選んだという意味ではなくて、医学者の研究しか見当たらなかったという理由によるものである。

E、高木俊一郎の立場

小児の精神医学的疾患及び症状を、次の三種

(1)脳神経の器質的・機能的障害を伴って起こり易い症状及び疾患

(2)心因性身体・精神の適応障害

(3)小児の精神病

に大別し、さらに(2)の心因性身体・精神の適応障害については次ページ上の表のように再分を試みている。

心因性の精神および身体の適応障害として現われる症状

Ⅰ	身体反応の障害 Psychophysiologic (or Psychosomatic) Disorders	中枢神経系	頭痛・偏頭痛・嘔気・失神発作
		心臓循環器系	心悸亢進・頻脈・不整脈・心臓痛
		呼吸器系	呼吸困難・気管支喘息・息止め発作・神経性咳嗽
		消化器系	唾液分泌異常・ヒステリー球・反すう・空気嚥下・神経性嘔吐・神経性下痢・腹痛・便泌遺糞症
		泌尿器系	神経性頻尿症・夜尿症・尿閉
		四肢および筋肉系	ヒステリー性運動麻痺・(チック)・(吃音)
		感覚器系	ヒステリー性盲・ヒステリー性聾・ヒステリー性感覚鈍麻痺・過敏・倒錯
Ⅱ	神経性習癖 Neurotic Habits	睡眠障害 言語障害 食事障害 身体玩弄癖その他	不眠・夜驚・悪夢・夢中遊行 吃音・吶・緘黙 食欲不振・偏食・拒食・異嗜症・多食 指しゃぶり・爪かみ・自瀆・チック・左利き
Ⅲ	情緒・行動の障害 Behavior Disorders	情緒上	神経質傾向・不安・恐怖・憤怒・しっと・反抗・我儘・孤独・内気・無口・白昼夢・敏感・遅鈍内向的
		行動上	癇癖・嘘言・破壊癖・けんか癖・残酷・盗癖・無断欠席・性的非行・家出・放浪・放火

この表のうちⅠの身体反応の障害は、PSD(—Psychosomatic disorders)すなわち精神身体症で、Ⅲの情緒・行動の障害は筆者のいうパースナリティの障害である。米国精神医学会のPSDの解釈によると、(精神または感情の影響の結果)変化が機能的(器管の働きの)段階を越えて、器質的(身体的)なものにまで進行しているのが精神身体症である。

そして高木はPSDを規定するための条件として、次の三項目をあげている。

(a) 身体症状が強くあらわれる。

(b) 一般的治療と併行し、あるいは単独の方法によって主として心理的立場から取扱うことに意義がある。

(c) 心理的治療の実行が可能である。

しかしながら、狭義のPSDにおいては、身体症状が一つの器管に固定して現われることが特徴であるのにかかわらず、小児の場合には、未分化、未成熟からくる特徴として、身体反応あるいは全身反応の形で現われる。例えばいわゆる自家中毒か、えきりのような、全身の激しい自律神経の失調の形で現われたり、あるいはホスピタリズムのように身体の発育障害とともに情緒・行動の問題を伴ってくる。さらに、小児では発達未熟のため抑制力が弱く、心理的欲求不満や葛藤が直ちに行動になって現われ易いという特徴がある。少なくとも三—四歳の幼

児ではそのような傾向が強い。このような理由によって、小児では運動・感覚神経系と自律神経系とに同時に現われることが多い。そして、これらの症状が一過性、変動性、不安定性をもっており、同時に全体的でもある。

右に述べたことはＰＳＤのことであるが、小児の神経症の場合には、精神と身体とが成人の場合よりもいっそう密接に結びついているので、身体症状を主とする神経症の形をとりやすい。また成人に比べて病状が単純であることが多い。要するに小児の神経症は神経症前状態、あるいは不全型神経症や神経症反応というべきものが多い。

前掲の表の中のⅠはＰＳＤ的な障害であるが、この中には頭痛、心臓神経症、顔面発赤及び蒼白、失神発作、神経性せき、息止め発作、小児ぜんそく、呼吸困難発作、食欲不振、神経性下痢、夜尿症などを包含し、Ⅱは神経性習癖で、不眠、悪夢、夜驚、どもり、食欲不振、偏食、指なめ、オナニー、チック等を包含している。

問題行動というのは、パースナリティの問題に関係するもので、引込み思案、落ちつきがない、登校拒否、盗癖、家出・放浪、しっと、我儘などを包含し、情緒行動の障害からのものは社会的基準に関連する反社会的な性質のものがある。

高木はもっぱら医学的な立場から問題の整理を試みているところから、それが自ずと神経系統に関連して考えられること、また精神身体の関連において取り上げられることはごく自然のことである。同時に問題の分類がまた右の二点を軸にして行なわれているのも当然である。また高木の使っている問題行動という言葉は、筆者が使っている意味とは全く異るもので、前述したように、パースナリティの関連において使用されているものである。

ただここで一つ問題になるのは、高木は、小児に神経症の存在を認めているか？どうかという問題である。その著書「小児精神医学の実際」（一九六四）によると、まず神経症とは「欲求不満や葛藤などによって心理的防御機制に破たんを生じ、そのために精神や身体の働きに障害が起こり、社会生活を円満におくれなくなった状態」であると定義し、しかし小児の場合ことに若幼児においては……心理的防御機制が未熟で自ら悩むということは少ない……小児では精神と身体とが成人の場合よりもいっそう密接に結びついているので、身体症状を主とする神経症の型をとりやすい。また成人の場合よりも症状が単純なものであることが多い」と称している。そして、小児の神経症は神経症前状態、または不全型神経症、神経症的反応というべきものが多い。そして、「小児が情緒の緊張や不安から身体反応、習癖・情緒・行動などの面に生活上困る程度の問題を起こし

成人の神経症の型に分類することが不可能な場合、すなわち成人に多く見られる完成型の神経症ではなくむしろその前状態、あるいはその不全型を小児神経症とよんではどうかと思っている」というのが著者の意見である。

高木は前掲の表の中に、神経症という言葉を使わないでいるが、おそらく、この表のⅠ、Ⅱ、Ⅲなどという分類にかかわりなく、右に述べたような状態が存在する場合には、小児神経症というレッテルをはるものであろうと思われる。

F、牧田清志の立場

牧田も児童精神医学を専門にする研究者であって、その見解は前述した高木の立場に似ているが、幾つかの特徴的な発言が注目される。

(a) 筆者のいう問題行動を、すべて神経症的な発症として扱っている。それは既に神経症になっているものだけでなく、神経性習癖をも包含するもので、それが「神経症的である限り、病態と呼ぼうと習癖と呼ぼうと……本質的に区別する必要を認めない」としている。そして「こういう範疇の障害は児童精神科外来がもっとも平均的な形で運営された場合、患児の大部分を含めるものである」と称している。

(b) 神経症的発症は、さらに、神経症的行動障害と精神身体障害に大別し、**行動障害**には、摂食に関する問題（拒食、過食肥満、異食など）睡眠に関する問題（不眠、悪夢、夜驚症、夢中遊行、過眠など）言語談話の問題（緘黙、言語の遅れ、どもり、感覚性失語症など）習慣的に身体をいじることの問題（拇指しゃぶり、爪かみ、唇しゃぶり、鼻ほじり、耳を引っぱる、性器いじりなど）学業の問題、登校拒否の問題、性的問題、怒り、嫉妬、恐怖、不安・不安発作、分離不安、心気症、強迫、ヒステリー、非行的行動、などを包含するものとしている。

精神身体症的発症としては、頭痛、偏頭痛、赤面と蒼白、失神発作、呼吸停止発作、ぜんそく、神経性不食症、反芻、悪心・嘔吐、乗り物酔い、便秘、チック、遺尿、夜尿症などを包含している。

牧田の立場は、おそらくその師、レオ・カナーと同様に、小児神経症という言葉を使うことを避けているのであって、その代わりに神経症的発症としているものであろう。結局、小児の場合、神経症を規定することが困難である事情に鑑みて、あやしきを律せずして、神経症的となったものであろう。これは外国の学者の間にも、カナーをはじめ、その他にもしばしば見られる傾向である。

G、岩波文門の見解

岩波はその著「臨床小児神経症」（一九六四）において、児童の行動障害を全面的にカバーしている。ただ岩波は神経症の定義、精神身体症の定義などいずれも、困難なものであること、並びに諸研究者間に意見の一致のないことを認めながら、現在における神経症の概念規定の傾向として、

「心因性障害であること、機能的障害であることの二つが神経症の概念規定の根本になっているが、しかしすべての心因性障害ではなく、またすべての機能的障害を意味するものではなく、このうちの**特別**な、**定型的**な精神的因果関係が病的現象をもたらすような場合にかぎると規定する傾向がある。しかしこの**特別**な、**定型的**な言葉の内容は明確にされておらず……所詮見解の一致を見ていない」と述べている。

けれども岩波は、はっきり乳幼児においても神経症の存在を主張しているのであって「少なくとも、小児科臨床のうえから乳幼児にも神経症ということのできる病像は存在し得ると考える」といい、さらに、これを補足して次のように述べている。

「小児においては、未分化な内分泌機構および体液性機構と相まってなんらかのストレスに対して自律神経不安定性と解釈できる身体症状を発現することが多い。しかし一般に心因性の刺げきに対して内的な精神的苦悩という現象を呈することは乏しく、これらに対する反応は直接に身体的の現象として発現されてくる。すなわちこれらの反応は乳児期には自律神経症状として発現するものが多く、第一反抗期以後には一部行動異常として解釈できる型のものも認められるようになる。しかし社会的行動異常として問題になるものはまれで、むしろ日常生活の面で身体的悪癖として自律神経と関連をもった症状として考えられるものが多い。

小児はその心身の発達過程において乳幼児期にはとくに同一のものごとに反復接触することによって、そのものを体得する特徴、すなわち固執性が強い。ここに心因性の不調和が生じたときに習慣異常の現象が発現するものである。このように情緒的な問題とともに自律神経が大きく関与した身体症状と行動異常が乳幼児の神経症の主体であると考えたい」

なお岩波は、小児神経症の各論として神経質、食事の問題、循環器の問題、消化器の問題、呼吸器の問題、アレルギー性の問題、皮膚の問題、内分泌の問題、排泄の問題、脳神経系の問題（睡眠、立ちくらみ、乗物酔いなどO・D症状の問題）チックの問題、行動異常の問題（神経性習慣、社会的行動異常）などを取り上げているが、これらの項目は諸研究家が取り上げている項目と大同小異である。要するに、岩波はこれらの障害をもって全部小児神経症のカテゴリーに入るものとしていると考えることができる。

北欧保育短信（四）

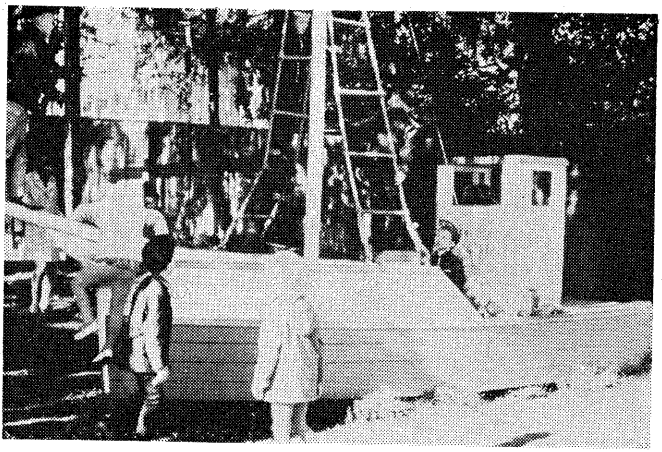
飯田泰造

子どもが絵を描いたり、ものを形づくったりする活動、それらは子どもの遊びであり、また遊びから得られたものの表現であるからには、子どもにとって遊具はとても大切であることは申すまでもありません。今回はその遊具の中で特に外遊びの遊具について、これまでに見てきたものを紹介することにしましょう。

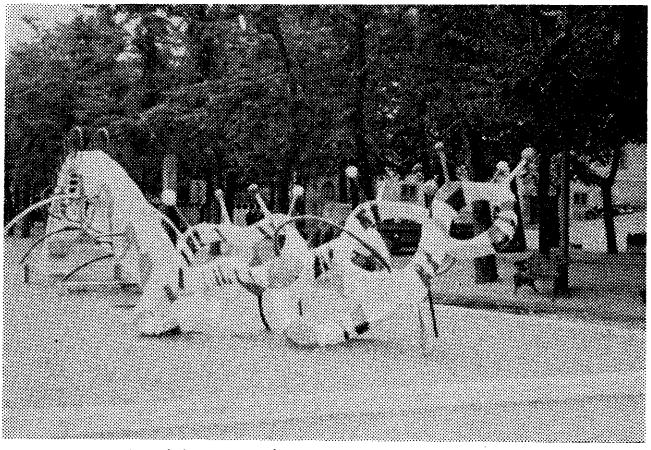
ウメオー（Umeå）で、先生たちのくふうした素朴な木材をくみ合わせた遊具を見て、私たちもぜひ保育者の手でくふうし、遊具を作ろうではありませんか、と申しましたが、それは大切なことだと思います。

木材の豊富なこの国では、冷たい感じのする金属製のものを極力さけた、したしみのある木材遊具をしばしば見かけました。それはこれまでに見てきた他の北欧の二つの国、デンマーク、フィンランドでもそうでしたが、私たちにも「これならやれるな」と思うものが、ずいぶんありました。時に

自然木のままの遊具



フィンランドの幼稚園にあった「船」



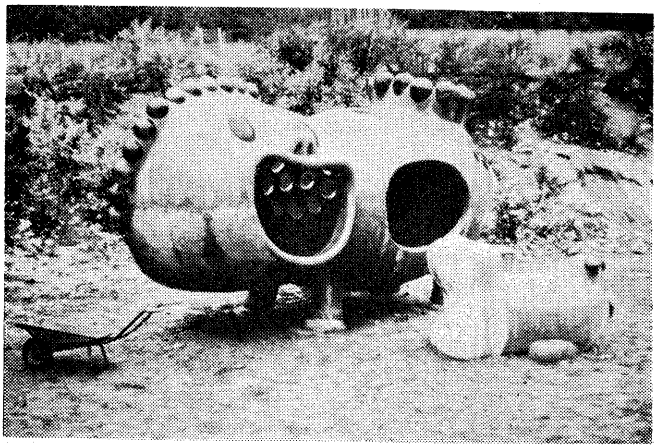
ストックホルムのプレイスカラプチュア

はただ、切り出してきたばかりの自然木をねかせたままのものもありましたが、子どもにとってはかえって親近感があるのか、とてもよく遊んでいるのを見かけました。

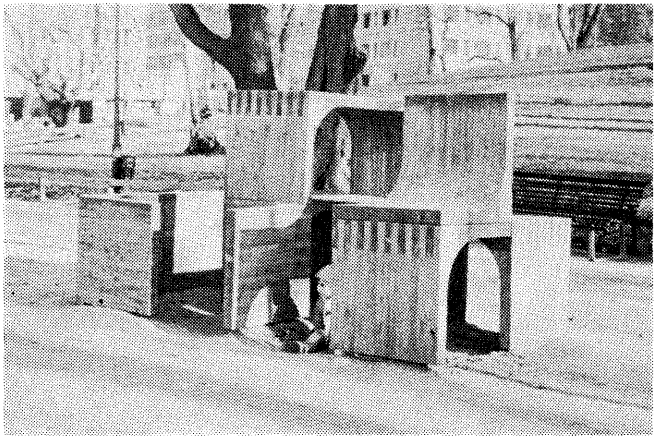
フィンランドの幼稚園で見た「船」は大へん写実的なものですが、子どもたちが心ゆくまで楽しんでいるのを見て、こんなものもいいなと思いましたが、ストックホルムではさすがに、新しい感覚に立ったいろいろな遊具を目にすることができました。

プレイスカラプチュア（Playsculpture）は、子どもが、自由に想像をたくましくして遊ぶことのできる遊具で、日本にもこの頃、ずいぶん見かけるようになったものの、公園だけにとどまらず、幼稚園や保育園の庭にも欠かせないものであろうと思います。

それは、ただ運動するための遊具、つまり運動具であるにとどまらず、夢や想像をかきたてるようなものをもということで



ストックホルムの
プレイスカラプチュア

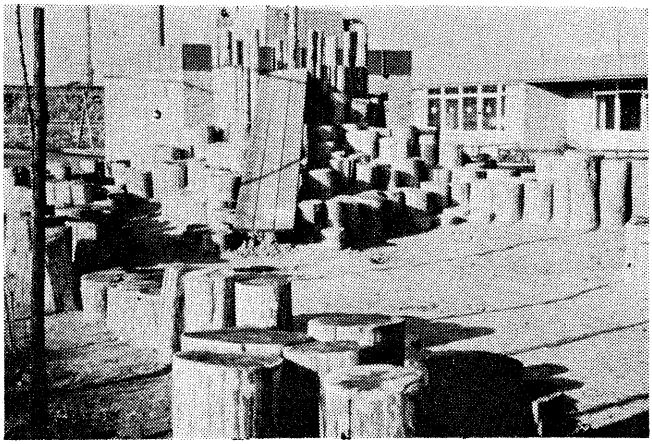


ストックホルムの
プレイスカラプチュア

す。

マルメー（malmö）市は、スウェーデンのほぼ南の端に位置する町ですが、ここは学校建築について、意欲的にいろいろな試みをしているので有名です。私は、そこで幼児教育の施設にもなかなかおもしろいものを見ましたし、また、室外の遊具にいくつかの大胆な試みを見ました。

木材を実に豊富に使った「かくれ家」や「船」や冬の「雪合戦のとりで」などもありました。このことでは、デンマークはもう三十年も前から playground の運動を展開していることで知られています。コペンハーゲンのフローベルセミナリー（Frøbelseminariet）という保育学校のヘッドマスターであるシグスガード（Jens Sigsgaard.Mr.）は世界中にこの運動をおし広めた人として有名ですが、私は一日先生の案内でコペンハーゲンのプレイグラウンドを見せてもらうことができました。

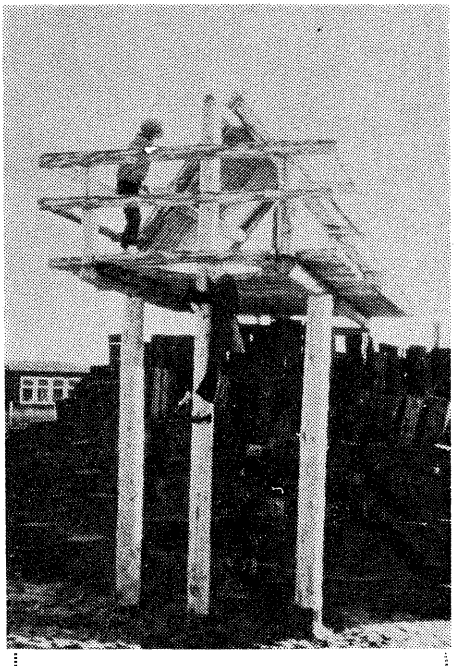


スウェーデン
マルメーの大がかりな遊具

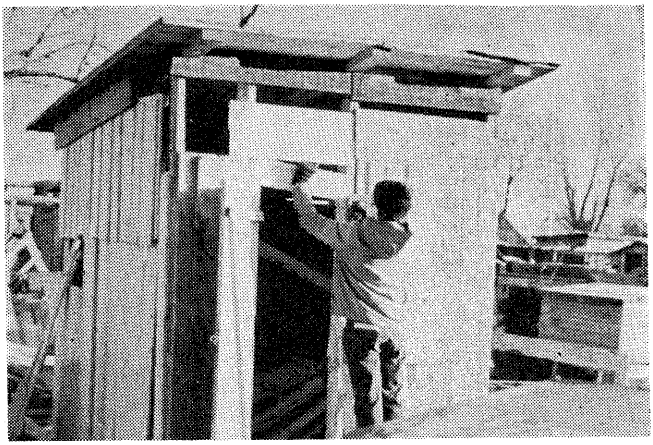
もう寒い時期に入っているので、子どもたちが、十分な活動をしていなかったことは残念でしたが、かなり広い地域が、全く子どもたちだけの自治的な活動にまかされていて、工場や国からもらったたくさんの素材（主として木材）で、思い思いに小さな家をたくさん作り、そこで遊ぶのです。別棟では、牛や山羊を飼っていてそれを世話したり、また、造形の部屋では、それぞれが製作をしたり、またパン作りなどをして、それは楽しそうに、また真剣な面もちで活動をしていました。このような施設が、コペンハーゲンのあちらこちらだけでなく、国中にあるというのです。それは何と思い切った活動でしょう。そして子どもへの信頼しきった愛情でしょう。

ここまで徹底してやってもらっている子どもたちの幸せを考えずにはいられませんでした。

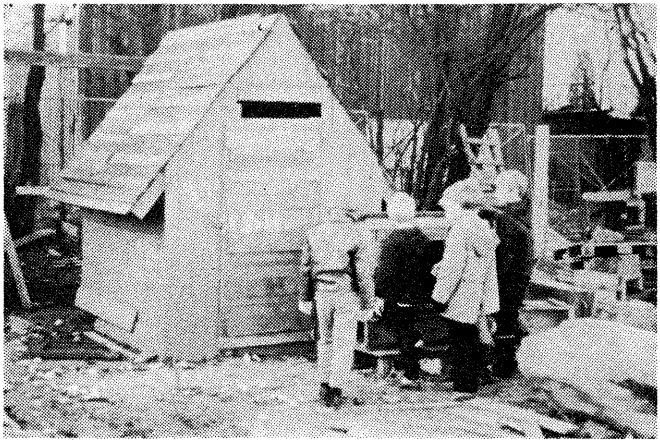
また、いくつかの保育所や幼稚園も訪ね



スウェーデン
マルメーの雪合戦のとりで



デンマークのプレイグラウンド
思い思いの家をつくる



デンマークのプレイグラウンド
自分たちでつくった小さな家であそぶ

ることができましたが、デンマークは、ほんとうによく室外の遊具が研究され、また改良されているのを見て、この国の保育が創造的であることに定評のある一つの原因が、そこにもあると感じました。

カールベルイの保育園ではたくみに酒樽を利用した遊具がありましたが、ここはあるビール会社の付属施設でした。また、町のあちこちには、たくさんの小遊園を見かけ、そこには必ずといってよいほどくふうをこらした遊具が見られ、市がこのために払っている犠牲の大きさをも思ったことです。

日本にも、もっとたくさんの遊びの場――それはよく子どもの発達や心理を考えたものが与えられ、また遊具がくふうされ、開発されるようにと思われました。そして、そこに保育者の一つの課題もあるように思うのです。

一九七〇年一月三十日　スウェーデンにて

生きている音楽教育——コダーイ・システム

加勢るり子

ハンガリーの大作曲家コダーイ・ゾルターン（Kodály Zoltán 1882～1967）の音楽教育理念が、現実に具現化されて、〈コダーイ・システム〉の名のもとに世界中の注目を集めるようになったのは、まだこの十年余の間のことです。

〈専門の音楽家を育てるばかりでなく、すぐれた聴衆をも育て、人類共通の幸福のために、ひろく、音楽の価値を世にしらせよう〉との目標のもとにある、この音楽教育システムは、現時点の私たちの音楽教育界にとって、もっとも興味ある、また参考になるものの一つであるといえるでしょう。

コダーイは、真の芸術とそうでないものとのけじめをきびしく考えていました。そして、これを知るためには、内的聴感を育成して、本当の音楽性を身につけなければならないし、そのためには、まずうたうことからはじめて（ソルフェージュとは、元来歌唱練習という意味である）真の内的なきく能力を作らなければならない、と考えていました。また、音楽と人間とのかかわりあいを、できるだけ自然に音楽教育体系の中にもりこむこと、音楽史の発展過程をそのまま、子どもの成長過程の中に再体験させて行くことなどの重要性についても考えていました。

一方、私たちの国と同じような、音楽的後進性および特殊な言語（ハンガリー人はアジア人種で、ハンガリー語は日本語と同様膠着語に属す）をもつハンガリーの国情は、

〈ハンガリーの音楽文化〉〈ハンガリー人を育てる音楽教育〉などの表現にみられる民族性の強調という必然を生みました。

普遍的音楽教育と民族性、ともすると不協和音になりかねない、この両者を結びつけることができたハンガリーの幸運は、伝統音楽の豊饒さと、今世紀の偉大な才能バルトークとコダーイの出現にあると思われます。彼らは自国の伝統音楽に根ざした芸術作品をものして、行き悩んでいた西欧音楽に、新しい道を切り開くことができたのです。

このピラミッドの頂点を指標にもつ、コダーイ・システムの内容とは、大変ユニークなものです。

まず、幼児時代こそ、〈音楽〉のもつ〈すべて〉の基礎づけにもっとも適している時期として、保育園での音楽教育に大きな比重がおかれています。幼児たちは、すべての子どもは音楽上の母国語からはじめなければならないという原則に基づいて、ハンガリーの遊ぎうたや民謡を教わります。そのさい、なるべく楽器は使用しないで、幼児の生理にもっともかなった〈歩く・うたう・手をたたく〉の方法で耳からうたを教えます。そして、子どものもつあそびの本能や集団の本能を生かしながら、人間本来の創造性をみちびき出そうとするのです。

つぎに、ア・カペラ（無伴奏合唱）の合唱教育と、ソルフェージュの重視も、このシステムの特徴といえます。コダーイは、みずから、数多くの子どものうたや、合唱曲をかき、音楽教育用のレパートリーを豊かにしました。

ソルフェージュは〈移動ド方式〉によっており、ハンド・サインやサイレント・シンギングなどの応用範囲の広い有効な手だては、それまでの諸外国の方法からもとり入れた総合的なものです。

このソルフェージュと、器楽教育との結びつきは強く、その中でも、楽器を習いはじめる前に、ソルフェージュとうたで構成される〈予備コース〉課程が実施されている点が目立っています。

ハンガリーには、一般保育園（ハンガリーの保育園は、日本の幼稚園と保育園をいっしょにした性格のもの）、一般小学校（八年制）、一般中学校（四年制）の他に、とくに歌と音楽（学）部を有するものがあり、これらをそれぞれ音楽保育園、音楽小・中学校と呼んでいます。音楽のつく系列のものは、一般と同じ教材・カリキュラムによっていますが、一般のそれに比べて、音楽の授業数が多く、いず

れにせよ、コダーイ・システムによっていることに変わりはありません。

以上の課程以後は、段階的に、適性に従った音楽教育が行なわれるようになっています。そのためには、細かい配慮による種々のコースが設けられており、最高機関としての音楽アカデミー（リスト・アカデミー）では、音楽専門家が養成されるしくみになっています。

このように、すべての人を基盤にして考えられたコダーイ・システムは、その音楽活動のあり方が、次第に下の方から上部へ向かって実現されてきており、その過程においては、理論や教科内容の計画よりも、むしろ実際の子どもを育てる実地から発展してきています。ですから、このような方向、体質からの要求が、全体の求心力となっていることを理解しないと、あらゆる部門が有機的につながりあいながら展開しており、しかも大変柔軟性をもっている、このシステムの真価を、見誤るおそれがあります。

〈音楽は批評の目的物として意図されてはいない。滋味・栄養として意図されている〉――コダーイ・ゾルターン

コダーイ：あそびと教材うた

＜幼児音楽教育＞の講演と実技

とき……7月27日，28日（月・火）A.M.8.30
ところ……お茶の水女子大学　講堂
（国電大塚駅下車）

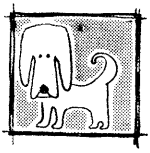
プログラム

★ こどもとうた	前東大脳研究所長 京都大学教授	時実利彦
★ 幼児の才能開発	青山学院大学教授 愛育研究所部長	牛島義友
★ 幼児の発達にもとづいた教育	お茶の水女子大学助教授	津守　真
★ コダーイ・システムとその生かしかた	お茶の水女子大学講師 コダーイ・システム研究会長	加勢るり子
★ 実　技		

主　催……コダーイ・システム研究会
渋谷区本町6-2-4　TEL 377-0740
後　援……お茶の水女子大学児童研究会
テキスト……「小さい人たちのうた」「世界の子供のうた」「ピアノの学校」
会　費……1人，1,000円（当日受付にて）

幼稚園のある一日

二月



内田和子

一、はじめに

一年保育の五歳児も、入園以来十一カ月もたつと、私自身も驚くほど幼児たちは、心身共にたくましく成長し、たいへんたのもしく感じるようになってくる。

ひとつのあそびも、友だちといっしょに考えて、相談してルールも作られ、次々に活動をしていき、教師が入る余地がない時もあり、幼児自身のすばらしい創造性、自主性に戸惑ったり、喜びを感じたり、教えられたり、幼児教育のむずかしさをつくづくと感じさせられる。

そこで、二月の幼児の姿を一月の姿からみて、私なりにつぎのように考えてみた。

① グループの一員として、活動をする。

② 自分の思っていることを友だちにはっきりいい、友だちの意見もすなおに聞き入れる。

③ 自分のもっている力を十分に発揮する。

④ 友だちになじみにくい幼児もみんなの力であたたかくつつみ、仲間に入れてやる態度ができる。

⑤ 困ったことは友だちと話し合って解決する態度ができる。

つぎに、具体的にある一日について述べてみたいと思う。

二、実践例

(1) **月日**　二月九日（月）

(2) **前日の活動**

① 楽隊あそび

Y子を中心にして、はじめ、三名で〝おうまのおやこ〟の曲で四拍子の一拍目を太鼓、二、三、四拍目をカスタでうち、あそんでいたが、単純なことと、友だちがだんだん増してきたことなどで、現在練習している〝みんなでたのしく〟の曲に合わせ、それぞれのパートをきめて活動する。

② 白雪姫ごっこ（げきあそびの導入として）

二日前に、教師といっしょに絵本をみたことから、このあそびが現われ、昨日は、姫や小人になって、レコードをかけておどったり、〝かごめ〟をしてあそんだりしていたので、教師も仲間入りをして、積木で小人の家を作り、小人や姫が、ことばを使ってあそびがつづけられるようにしむけた。

③ トランプ

一月の中旬から、はじまっているあそびであるが、〝戦争ごっこ〟（各自一枚ずつ、「一、二、三」でカードを見せ、数字の多い方がカードをもらい、最後にカードの多い方が勝ちになる）を興味をもって、六人ぐらいのグループでしていた。

④ お話作り

八つ切りの画用紙を四半分に切り、そこにお話の絵をかき、それをつづけて紙芝居を作っていたもの。また、本を作り、自分たちの知っている童話や創り話をかいていたものもあった。

(3) **本日の指導のねらい**

① 全体の活動を通して

・グループの中で、自分の意見をはっきりといい、また、友だちの意見もすなおに聞き入れる中で、ひとりひとりの創意やくふうが生かされるようにする。

・グループの中で、役割をきめて、交代し合ってあそぶ中で、どの幼児も正しくリズムがつかめるようにさせる。

・言語活動が活発になるように、また、ふんい気がでるように、小道具なども考えて作らせる。

・寒さに負けずに元気よく、戸外であそぶ。

(4) **実践**

八・三〇

★登園での出会いとウォーミングアップ

・「先生おはよう」と、元気な顔が保育室に入ってくる。出席カードに印をおしにいくもの、洋服を着替えにいくものなどいろいろで、この頃になると、教師の顔を見て、にこっと笑うだけで、さっさと友だちのところへいってしまう幼児が多い。ほとんどの幼児は、今日はこれをしてあそぼうと目的をもって登園してきており、四月の入園当初と比較して考えてみると、幼児たちは先生がいてくれればそれだけで安定して、あそびに入ることができるようである。これらの幼児を目の前に見て、現在はこれでいいのだと思う。しかし、私のところへ身体的な接触を求めにこない幼児たちに対して、同時に、私を残して大きく羽ばたいていくような感傷的な気持になることもかくすことはできない。

・F男は、登園するとすぐ、土曜日から作ってあった白雪姫の家（中積木）の上に、ひとりでひじをついてすわりこんでいる。どうしたのかな、何を考えているのかな、と、思いながらだまって眺めていると、N男らが登園してきた。早速F男は、「おい、Nちゃんここや、はよこい、昨日のつづきしようぞ」と、よんでいる。N男は、「おお、まっとってくれよ」と、返事をし、またふたりで積木の家の上ですわりこんで友だちをまっているようである。今日もN男たちは、友だちと元気よくあそぶことができるだろうと安心をする。

・元気者のW男が登園してくる。いつも、「おはよう」と声をかけてくれるのに、今朝は私の前に立っているので、教師「Wちゃんおはよう」と、声をかけるとW男は、だまって教師の顔をみてから、洋服を着替えにいく。洋服を着替え部屋に入り、きょろきょろと周囲を見わたしていたが、ひとりで積木のところへ行き、積木を立てかけて、自分も立っている。いつものW男とちがうなと思い、きょうはどうしたのかなと考えながら見守っていると、やがて積木で自動車道路を作りだし、半分ぐらいでき上がったところで、ブイとあそびを打ち切り、ひとりでブロックのかごを持ちだし、何やら組立てはじめたが、それも気に入らずすぐやめてしまった。朝気げんよく家をでたのかしら、途中でだれかとけんかしたのかしらと思いながら、W男に近づき「Wちゃん、きょうはH君とあそばないの、あそこで白雪姫ごっこしているわよ。先生といっしょに入れてもらいましょうよ」と、誘いかける。

ちょうど白雪姫ごっこのグループが役割のことでうまく相談がまとまらないらしいので、W男といっしょに仲間入りをする。W男は、すぐに小人の役にしてもらい、みんなのあとについてあそびはじめた。はじめは、めずらしさもあり、喜んであそんでいたが楽隊あそびのグループが、リズムに合わず困っているようなので、楽隊グループの方へいくと、まもなくW男もこのグループに

加わってあそんでいる。教師がいるところについてきて、そこで何とかあそんでいるがどうも元気がない。いつも積極的に物事にとりくんでいくW男がどうしたのだろうと考えながら、いろいろとたずねてみても、きょうに限って何も返事をしてくれない。たまには、こういう日があっても仕方がないと思う反面、W男の気持のつかめなかった私自身を反省するのである。

・T子が登園してくる。まもなくH子も登園してくる。T子「Hちゃん　あそぼう」H子「手がつめたいで、ストーブにあたろうに」T子「うん」と、いって、ふたりは、椅子をもってきてストーブの横にすわる。H子「Tちゃん本読もうに」といって、ふたりは、それぞれに自分の選んだ本をもってきて、だまって読んでいる。読みおわると、どちらともなく立上り、ジャンピングでとびあがりっこをしてあそんでいる。運動量も多く、はげしい動作なので、疲れてきたらしい。T子「Hちゃん、きのうのつづきしよう」といって、ふたりは、机をストーブの横にもってきて、本作りをはじめる。ずっと見守っていた教師は、T子たちが落ちついてあそびだしたので、ひきつづき見守ることにする。

しかし、全体の幼児の発達についていけない幼児も二名ほどおり、特に、教師と話をしたがったりするので、できるだけその幼児の要求をみつけてやり、いっしょにあそぶことにより、満足感を味わわせ、その幼児たちがのびのびと豊かなあそびが経験できるように心がけることがたいせつであると感ずる。

八・五〇

クラス全体が、ごたごたしたウォーミングアップのような時を経て、落ちついてあそびだしたようである。

★楽隊あそび

・Y子たち六名は、楽器をもって、楽隊あそびである。（一週間前から、全員でやっている〝みんなでたのしく〟の曲）Y子は大太鼓、B子、O子は、タンバリン、S子は、カスタとシンバルの二役、M男は、タンバリンと鈴、N子は、トライアングル、Y子は、メロディをうたいながら、それぞれのパートを指示している。そして、大太鼓も受持っている。

教師「みんなYちゃんの方をよくみて、合わせなさい」と、いう。Y子は、得意顔である。ふたつの楽器を受持っているM男やS子は、大忙しである。でも、とても楽しそうである。A子とL男が仲間入りしてくる。Y子は、「M男ちゃん、どちらかかしてあげたら」と、いう。「うん」と、M男は、鈴をA子にかしてあげる。教師「そしたら、Sちゃんもひとつ先生に楽器かしてちょうだいね」と、いうと、S子は、シンバルをかしてくれる。

つづけて演奏をしていると、「わたしも入れて」「先生もしてるの」といって、他の幼児も仲間入りしてくるので、だんだん仲間もふえ、Y子は大へん忙しそうである。Y子「だれか、たいこかわってほしいわ」教師「本当よ、Yちゃんひとりでえらいものね」と、あいづちをうつと、O男「よし、ぼくがしたろう」と、いう。Y子「うん」と、いって交代し、自分はメロディをうたいながら指揮をしている。Y子「Sちゃん打ち方ちがうに、こうして、タンタンタン　トンと、やすむのやに。見ておってみな」Y子にいわれたS子は、いっしょうけんめいにおぼえようと努めている。

友だちもふえY子の声では、よくみんなに聞えないし、Y子も疲れるだろうと考え、教師が、ピアノの伴奏をしたらもっと楽しくなると考えて、ピアノを弾きだした。みんなは、はじめ、変な顔をしていたが、S男「先生が、ピアノ弾いてくれるとじょうずにできるなあ」と、いう。

教師がピアノを弾きだしたので、他のあそびをしていた幼児も仲間に入ってきたので、Y子は、全体の幼児を見られなくなり、Y子「ちょとみんな、この台の上にのってしようにに、たいこだけ下でさ」と、発言したので、舞台の上にみんなのる。A子ら四名は、椅子をもってあがり、すわっている。それをみて、K男「椅子は前にならべて、うしろは立つのさ、いいやろう」と、みんなにいう。そのものになりきってする楽団のような感じになった。

このように、ごっこ的なものから、一歩すすんで現実のものに近づけようとする幼児の姿をみて、ここまでに発達してきた幼児の要求にこたえて、教師が前面にでて指導するときもあってよいのではないかと思った。M男「Oちゃんたいこ代ってくれよ」O男「よし」と、いって今度は、タンバリンをもっている。教師も楽しくなり、つづけてピアノを弾きだした。S男のカスタが、みんなとそろわないので、S男にわからせるために、ピアノをはっきりとひいた。S男もまちがいを気づき、なおした。

タンバリンは動きが大きくなるので、少々舞台の上ではせまいようである。O男「タンバリン、おりようにに、ここでしよう」と、舞台の横におりた。みんなもつられておりてしまった。「本当にいいことを思いついたわね。そこならいくら元気よくたたいても平気よ」と、いいながらつづけてピアノを弾いた。タンバリンの幼児は、大きく動作できるので、身体を動かしながら打ったり、とんだりしている。

「おい、たいこ代って」「よし」と、一曲おわるたびに、大太鼓の役は、交代している。やはり太鼓は、一番の人気がある。クラス全体でやっていた時、気の小さいI男などは、順番がくると

いやがって、太鼓をたたこうともしなかったのに、きょうは元気よくたたいて大張り切りである。まちがえると、みんなで教え合っている。幼児たちも教師にいわれると恥ずかしそうにてれたりするのに、友だちにいわれるとうれしそうに笑いながらなおしている。I男をほめてやるとうれしそうに笑っていた。

★白雪姫ごっこ（げきの導入として）

友だち待ちしていたF男たち七名のメンバーが揃ったらしく、何か相談をしている。どうやら、まほう使いの役になり手がないらしい。I男「なんで、小人は小さいものやもの、ぼくは、小人しかあかんやろう」W男「そうやな」R子「わたしは、うさぎやもんな」M子「わたしは、白雪姫やしな」K男「そしたら、だれもおらんやないか」と話し合っているのに気づいたので、楽器グループに「白雪姫のところに先生はいくから、みんなでつづけていてね」と、声をかけてから、白雪姫のグループに加わり、少しようすをみてから、教師「そうしたら、まほうつかいのおばあさんなしにしたらどう」K男「白雪姫が死なんでおもしろないわ。王子が、だきおこすのやものな」と、いう。

I男「そしたら、Nちゃんにたのもうに。色は黒いし、いいやんか」という。みんなは、さんせいして、材料棚の中の掃除をひとりでしているN子のところへ走っていく。N子は、しっかりものだが気のいい子である。あまり友だちに誘われることの少ないN子は、何かを期待するような顔で喜んで仲間入りをする。みんなは、N子の気げんをとるように話をしかけ、とうとうおばあさん役に仕立てた。

白雪姫一名。おばあさん一名。うさぎ一名。王子一名。小人四名の役ができた。

小人「さあ仕事にいってくるよ」

白雪姫「いっていらっしゃい」

小人「おばあさんに気をつけるのだよ」

白雪姫「はい」

小人と白雪姫は、手をふりながら別れて行く。小人たちは、窓の方まで行って、仕事のまねをしている。

白雪姫「これから　おそうじでもしましょう」と、いいながら、積木の枠の中に入ってしまう。小人役のK男は、廊下のところまで走っていって、本物のほうきをもってきて白雪姫に渡してやる。K男の考えをうれしく思うと同時に、思いこんだだけではあそびがつづけていけなくなってきた幼児の指導について考えさせられた。すると、I男が「そんならぼくらも仕事するもの作らなあかんやないか」という。みんなは、うなずく。

I男「こっちへこい」と、小人の幼児らをBブロックのところにつれていき、長くつないで、つるはしのようなものを作ったり、棒のようなものを作りだした。C男「何しとんの、ぼくも入れて」と、いってくる。I男「小人やないか」C男「小人て、なんや」B男「白雪姫ごっこやないか」C男「ぼくかて、その話よく知っているもの入れてな。手伝ってやるでさ」と、C男は、うまく仲間入りをした。やっとでき上がり、また、はじめからやりなおしである。

小人「いってきます」

白雪姫「いっていらっしゃい」……

M子の白雪姫は、「はよう、おばあさんこんか」と、N子をよぶ。N子は、うれしそうに「こんにちわ」と、でてくる。そして何かを渡すまねをする。姫は、ばったりと倒れる。小人は、まってましたとばかりとんできて、わんわんと泣くまねをする。そしてそこにU男の王子が馬に乗るまねをしてやってきて、姫をだきおこす。目を開けて、めでたし、めでたしである。

これまで幼児たちの活動の発展がどうなるかと思って見守っていたが、うさぎの役のR子が他の役の幼児の中にうまく入ることができず、せっかくみんなと相談してこの役をきめたのに、R子もかわいそうだし、他の役の幼児たちがそれに気づいてほしいと思い、みんなに声をかけた。

R子「でもね、でれやへんだもん」と、少々不服そうに訴える。教師「そうね。Rちゃんは、どんなふうにしたかったの」とR子の気持をたずねると、R子は、「姫を助けたかったの」と返事をしてくれる。教師「そうね、そうしたら、小人さんたちがお仕事にでかけたら、そのあとで、姫のお手伝いをしたり、守ってあげたり、あそんであげたりしたらいいじゃないの」と、相談をもちかけると、R子は、「うん」といって、何か考えているようである。他の幼児も教師の意見を聞き、F男「ぼくらのでかけたあと、Rちゃんしな」と、いう。

そこで、教師は、もう一度R子も含めてみんなであそばせたいと思ったので、「ねえ、みんなでもう一度うさちゃんも入れて、やってみたら」と、ことばをかけた。みんなは、「うん」と返事をしてくれる。教師は、今度は、R子も楽しく活動できるだろうと期待をもった。ぼつぼつこの活動に気がついた他の幼児たちが見にやってきた。そして、「もっとしゃべろ」とか、「かっこいい」などと、声援してくれるので、R子も「白雪姫さん、小人のいないうち守ってあげましょう」と、いいながら張り切っている。小人たちも元気よく活動をつづけている。やっと、R子もみんなの前で自分を表現できたので、うれしく思ったと同時に、すなお

に受け入れてくれた他の幼児たちも立派だとうれしく感じた。

★絵本作り

・一方、T子、H子のふたりは、机をストーブの横にもってきて、絵本を作りはじめた。T子は、お料理の本で、卵焼きの作り方などを文字で、『砂糖二はい、卵二個をまぜフライパンでやきます』などと書いている。H子は、動物やらお姫さまやらの絵をかいている。どうやら自分で話を作っているらしい。使っている紙が、包装紙の裏を利用しているので、せっかくの作品がよくみえないとかわいそうだと思い、画用紙の方が丈夫だし、はっきりとみえていいから替えたらと、声をかけると、ふたりは、喜んで画用紙をとりにいき、T子「Hちゃん、もっと作ろうね」と話しながら作り続けている。これでいいと思って、ふたりにまかせて活動をさせた。

★トランプあそび

・T男とE男は、トランプで〝戦争ごっこ〟をしている。カードを二つに分け、一、二、三で、それぞれが、自分の手持ちのカードを一枚だけ出す。数の多い方が勝ちで少ない方のカードをもらってしまうというルールで、カードのなくなるまでやるのである。このグループも自分たちの力できちんとやっていけると思ったので、そのままあそびを続けさせた。

・他に、お家ごっこや粘土であそんでいる幼児もいるが、ここでは紙面の都合上省略をする。

一〇・一〇

★陣とり鬼

室内あそびに疲れを感じだしたのか、白雪姫のグループが、外へでてかげふみ鬼をはじめた。他の幼児たちのあそびにも区切りがみえだした。そこで、外へでて、かげふみ鬼の仲間入りをする。半数以上の幼児が外へでてあそびだしたので、室内に残っている幼児にもこのような暖い日に思う存分走らせてやりたいと思ったので、「きょうは暖いし、みんなで陣とりしない。お部屋のお友だちも、さそってきてちょうだい」と、いっしょにあそんでいた他の幼児にたのむと、「わあい」と、歓声をあげて呼びにいった。陣とり鬼は、最近幼児たちに喜ばれているあそびのひとつでもある。

全員が集まったところで、もう一度「今から、みんなで陣とりをしてあそびましょう」と、話しかける。元気のよい幼児は、とびあがって喜んでいる。二組に分けるのに、男女に分けると多少

能力差がでるので困ったなとは思いながら、やはり、男女に分けた方がよく味方も判るので、男女にわけることにする。ルールは男女それぞれ三〇メートルぐらい離れて陣を作り、「用意　ドン」で、はじめ、相手方をタッチして、あてられたらその場でジャンケンをする。負けたら相手の陣へ行く。そして、味方のものがタッチしてくれたら助かり、自分の陣へかえれるのである。教師の合図ではじまる。男の子は、元気よく突進してくる。女の子は、はじめしりごみしていたが、だんだん元気がでてきて、能力のたりないところは、口でいいまかしている。

A男「Nちゃん　ドン」と、つく。N子はびっくりして、ジャンケンをする。A男が、負けたので、N子は自分の陣へつれていく。A男「おい、タッチしてくれ」と、助けを求め、味方の方に手をだす。女の子六名が前で守っているので、男の子は、なかなか攻められない。A男「おまえら、そんなにかこうな」という。S子は「それは、わたしらの勝手やないの。おこることないわなあ」と、他の女の子に同意を得る。この時期になると幼児たちも集団間の関係がよく理解できるようになってくるので、攻めるものと守るものとの役がよく理解されている。A男は、女の子のいうとおりと思ったのか、今度は、考えて地面にねそべって手をのばし、味方の助けを待っている。女の子が陣からでないので攻めあぐねていた男の子らは、やっとすきをみつけて、A男にタッチして、自分たちの陣へ戻っていく。

他の女の子は、ほとんど男の子に捕まり、陣を守っているものだけが残っている。男の子は攻めてくるし、なかなか陣から出られないので、女の子らは困っている。F男「そんなに長いこと入っておったらおもしろないわ、でてこな」という。H男も、「そうやんか、十かぞえるひまにでな、まけやぞ」という。そこで、あそびが楽しくつづけられるようにと思って、男の子に「ねえ、女の子がでやすいように、陣から少し離れてあげたらどう」と話しかけると、G男「そうやな、おまえら、少しさがってやれよ」と、命令する。女の子が不利になってきているので、D子「先生女ぐみに入ってよ」という。

教師もはじめ考えていたとおりの予想になったので、女の子に気の毒に思ったが、幼児たちは勝負にこだわらず楽しそうにしているので、安心しながら女の子の組に入れてもらってあそんだ。男の子のグループから「女ぐみ、こっすいな」とか、「いいやないか、女はよわいもの」などという声も聞えたが、あまり取りあげる必要も感じなかったので、つづけてあそんだ。幼児たちも室内から室外へでて、また、素朴なあそびに触れ、どの幼児も思い切り体を動かし走りまわったので、満足そうである。

いろいろと理くつをいう幼児もいるが、やはり集団でひとつのあそびを楽しもうとする気持は、十分めばえてきたようである。

十・五〇

★先生といっしょに絵本をみる

幼児たちは、十分活動して疲れをみせはじめたので、部屋に入り、絵本を読んであげることにした。全員を部屋に入れて〝百万匹のねこ〟の絵本を読む。

十一・二〇

絵本を読み終り、戸外へ、また、便所へとでていく幼児もある。教師は、げきあそびを発展させるために、小道具を作ろうと思い、昨日より用意しておいた色画紙で帽子を作りはじめると、「先生、何作っているの。わたしも作らせて」と、五、六人の幼児が集まってきたので、その幼児らに紙を配ってあげ、「これ、白雪姫の小人さんの帽子なのよ」と、説明すると、喜んで手伝ってくれる。「これでも作っていいの」と、聞きながら教師のするのをみては三角帽子を作っている。教師「ねえ、帽子の他に何か必要なものないかしら、みんなで考えてみて」と、誘いかけているところへ、T男がとびこんできて「先生、もうすぐ弁当でしょう」と、聞きにくる。時計を見ると十一時四〇分なので、あわてて、「このつづきは明日しましょうね」といって、一応片付けをしてしまった。考えてみればこの短い時間に製作が十分できるわけではないし、また、幼児の気持を十分に考えることもできるはずはないのに、本当に、何のために、何をしたのか、すべて中途半端になり、私自身のうかつさを痛感した。

十一・四〇

弁当の準備。昼食をたべる。

十二・三〇

おにごっこ、楽隊あそび、絵画などと、それぞれに楽しくあそぶ。（くわしくは省略）

一・三〇

降園

三、まとめ

今日も一日いろいろな活動が行なわれた。しかし、ひとりひとりが自分のもっている可能性を十分発揮することができたであろうか。また、自己表現の乏しい幼児に、自信を与え、ひきのばしてやれただろうか。と考え、主な活動について、もう一度反省してみたいと思った。

①楽隊ごっこ

きょうは、この活動を通して、幼児から学ぶことの尊さをつくづく知らされると共に、なおいっそう、教師自身が自分を鍛えていかねばならないと思った。というのは、私自身これまで器楽合奏をする場合、たいてい、クラス全体の活動の中で教師が中心になってすすめた方が、より効果的だと思いこんでいたのである。ひとりひとりを大切にし、集団を育ててきたつもりの私が、器楽合奏だけは、教師中心の方がうまくいくだろうと思いすすめてきたことが恥ずかしく思われた。きょうのような方法なら、みんな揃って楽しくできるのにと、本当に幼児に教えられた。

また、楽隊あそびの途中で、舞台を使ってあそぼうとしているその姿は、幼児自身あそびを現実の方向にもっていこうとするあらわれで、その態度をしっかりと受けとめて、前向きに指導してやらねばならないと思った。

②白雪姫ごっこ

これは、げきあそびの導入として取扱っていたのであるが、幼児の活動をみていると、やはり、幼児にはできる限界があるように思われる。教師自身が幼児の活動をよく見守る中で、適当に助言を与え、ひとりひとりの創意工夫をのばしてやらねばと思う。

そのためにも教師自身が、ひとりひとりが選んだ活動の中で、ある程度前面にでて、幼児と共に進んでいかねばならぬと思った。

③生活リズムについて

この頃のように寒さの厳しい時期は、幼児たちも朝から室内の活動にとりくみ、なかなか外へでて活動しようとしない。そこで、きょうのように暖い日には、つとめて戸外にでて活動するように心がけているが、その反面、生活リズムがくずれ、きょうの十一時二〇分から十一時四〇分までのような時間ができて、幼児も教師も困る間がでてくる。

運動量のはげしい活動は、長時間つづけてすることはできないし、これが、はじめ戸外活動をしていて、室内の活動へと移る場合だと、いろいろの活動や音楽リズムへと、生活リズムはスムーズに流れていくのであるが、それがうまく流れないことに問題があるようである。しかし、その中で幼児の生活のバランスを考えてやる必要がある。

いずれにしても、やはり、幼児と教師の暖い信頼によって、ひとりひとりの幼児を十分にのばし育てていかねばならないと思う。

（四日市市立下野幼稚園）

筧雄平について（三）

岡部茂

筧雄平の託児所開設当時の事情については、昭和十年四月二十五日発行の朝原梅一著「幼稚園託児所保育の実際」の記事があります。それは、もともと、内務省社会局嘱託相田良雄が、昭和五年八月十日発行の「人道」第二百九十八号に発表したものので、朝原書に次のように引用してあります。

筧雄平翁（明治44年・70歳）

「……略……明治四十一年の十一月頃私（相田）は鳥取、島根両県に出張したことがある。その時、鳥取県気高郡美穂村の筧雄平という老農（筆者注六十八歳）に聞いたのである。此美穂村の人は遠耕といって十町も二十町も遠方に耕作に行く。秋の忙しい時は乳呑児は連れて行くが学校に行かない幼児はほったらかしである。それが喧嘩をする、怪我をする、泥湖に落ち込む、監督者がないから無暗に飲み、無暗に食べる。何も知らぬ子供のことであるから可愛そうだと思い、筧氏は色々考えた末に自分の持家で青年団の夜学所にしてある家がある。之に子供を集めて世話をしてみたが、どうも男の手では毎日はやりきれない。そこでふと思いついたのは、庵住の尼さんがある。農繁期には閑である。この尼さんを頼むのがよかろうと、直ぐ尼

さんを招いて、庵住さんは子供を育てたことはないが、女であるから男のわしよりもましであろう、今頃の農家は多忙で、お回向を頼む方もなかろうから、村に恩報じの為に此処へ来て、子供の面倒を見て貰えまいか、只喧嘩をさしたり怪我をさしたりせぬようにして貰えばよいと頼んだ。乃ち庵住さんに幼児の守をして貰うことにした。それが農繁期託児所といえよう。それが明治四十一年の秋に聞いた話で、その事実は何年前のことであったか聞き漏らした。…略…」

これによると、託児所の建物は青年団の夜学所にしてあった家を利用し、子供の世話は尼さんに依頼したということになります。この尼さんのことについては後に詳しく述べますが、この朝原書の内容とやや似たものに昭和二十五年五月九日発行の田中新次郎編「鳥取県の子供風土記」があります。

すなわち、

「日本農村保育所創設者は鳥取県気高郡美穂村字下味野の筧雄平氏である。現今遺愛碑のある下味野村共同作業場の所に上味野村の浄土宗願行寺下の庵寺があった。その庵に仏に帰依して信仰の篤く、村民に敬慕された円随という尼僧があった。良寛のように子供好きであり、またよく子供も敬慕して、村の子供はつねに集った。遊びは子供の生活であるが、その遊びを精一ぱいさせ、遊びの間に童話、躾、遊戯によって全体を円満に導いていたので、忙しい農繁時の田植、稲刈の時にはまだ這うことのできない乳児さえ村人はつれて来て安心して田畑に働きに出た。斯様な状態が数年つづいたので村民も喜んだ。地主にして仏道に帰依厚い筧雄平氏は、これこそ子供のため村の家庭のため、必要であると認めて、いろいろの遊具を作った上遊ぶ室の工合もよく修理されたので次第に保育所としての形も整って来たのが明治二十三年五月であった。

生みの母親以上に子供に慕われた円随比丘尼は江津村の庵へ転住となったが、筧雄平氏は自分の妹及び小森神官夫人に援助を頼んで託児をつづけられた。明治三十三年には筧氏は更に建物を新築し自書して下味野子供預り所の看板を掲げられた。其の家屋は二階建で階下を子供の施設に、階上を青年のための会館として利用させると共に、壁間には東側に向って厨子を作り伊勢と出雲の大麻を入れ、反対側には観音像を西に向わせて飾られた」

これによると、筧の託児所は、はじめ円随という尼僧が、その庵の近くに集まってくる幼児たちを自発的に世話したのに始まったもので、筧雄平はこれを意図的に援助して保育所の形態をつくりあげたことになります。そして、尼僧の転住後に雄平翁が妹及び神宮夫人に依頼して託児所をつづけて経営したということが書かれています。これは、前の相田良雄の談話と少し

くいちがいがあるだけでなく、記述に誤りや曖昧なところがあるので、筆者はその信憑性に乏しいと見ています。記述の誤りというのは、筧雄平の妹とある点です。これは、「姉、ふじ」が正しいのです。

また、曖昧な所というのは、「遊ぶ室の工合もよく修理されたので次第に保育所としての形も整って来たのが……」とあるのは、尼僧の庵の一部なのか、別の建物なのか明白でない点です。このすぐ後に「明治三十三年には筧氏は更に建物を新築し」と書いてありますが、それが出来るまで何処に子供を収容したのか言及されていません。

ただ、明治三十三年に新築して「子供預り所」の看板を掲げた建物が「其の家屋は二階建で階下を子供の施設に階上を青年のための会館として利用させ」という点は、先の相田良雄の談話の「自分の持家で青年団の夜学所にしてある家がある。之に子供を集めて世話してみたが」という点にその内容が近似しているといえましょう。

第三に、以上の二者とちがって筧雄平の託児所創設の事情について新しい見解を示したものとして、鳥取の郷土史家蓮仏重寿氏の「二人の未亡人」と題する記事があります。これは昭和三十二年七月十五日発行の月刊雑誌「母子福祉」に掲載されたもので、すでに前号の「開設の時期について」述べた際にも一部を引用したのですが、今回は、開設の経緯という観点からの考察に資する意味で引用します。

「日本一早いといわれる鳥取県のものは、下味野（今は鳥取市・旧気高郡美穂村、その前は高草郡下味野村）の子供預り所のことで、これの創設者はその村の筧雄平ということになっている。しかしながら、保母として実際の活動をしたのは、二人の未亡人である。二人の未亡人が関係しているということが、この子供預り所の創始の時期をみる上の一つのきめてになると思う。

一人は筧ふじである。ふじは天保十二年正月に生まれた。翌十三年に雄平が生まれているから雄平の姉さんである。結婚の時が不明であるが、気高郡鹿野村商原田氏の嫁となったが、不幸にして明治十一年六月に不縁となって復籍した。その後、大正十三年九月二十九日死去の日まで、筧家で生活したわけである。……略……そのころよりもずっと前から、下味野神社のそば今の下味野公民館のあたりに庵があった。これは「因幡誌」にいう「辻堂」である。庵住さんがいて、子どもを連れたりおぶったりのおばあさんなどが遊びに来た。若し適当な人があってこれらの子どもを世話したらどうであろうかと、家で遊んでいる姉ふじのことを雄平は考えたと思う。

もう一人は小森安子である。……略……明治二十年、ふじは

数え年四十七、安子は四十五である。この二人が雄平の経営する下味野子供預り所というものに奉仕したのである。多少の手当はつけたようすではあるが、それは、ほんのお礼程度であったと思える。しかし、そういうゼニカネにかかわらず、この二人の未亡人が喜び勇んで、この仕事をやったことを思いみるべきであろう」

これによれば、下味野神社のそばの下味野公民館（現在、階下は部落の作業所となっている。公会堂ともいわれている）のあたりに庵があって、そのすぐそばに神社の境内などの遊び場があるため、その庵の近くに幼児を連れたおばあさんたちが遊びに来ていたのにヒントを得て、筧雄平が託児所を始めたというわけです。そして、朝原書及び田中書に、最初の保育者が円随尼であったと言われていたのと異なって、ふじと安子の二人の未亡人が最初の保育者であるという見解を示しています。この点については、筆者もこの蓮仏氏の考えと同じ見解を持っています。

その理由は、昭和四十三年四月二十七日、鳥取市下味野の筧雄平翁直系の筧本家で、託児所創設前からの生存者宮部しかさん（明治五年八月九日生まれ）から聞いた談話によるものです。それは、筆者が、田中書の「鳥取県の子供風土記」に書かれている阪本円随尼のことを聞いたところ、宮部しかさんは、「幡州から尼さんが来ていたが、円随さんというのは男で、フグが当ってものをハッキリよう言わなんだ。読経もワァーワァー言うばかりでハッキリせなんだ。尼さんは背中に大きなこぶがあって守はせなんだ」と話してくれました。

蓮仏氏も、この点を調査したらしく、「筧雄平伝覚書」に、

「阪本？　比丘さんの子で不自由なおやじがいた。エンズイといった。役に立つものではない。

ほかから比尼さんが来た。それが秋里か江津へいってしまった」

とかいてあります。蓮仏氏のこの記述は、恐らく小森道治に聞いたものであろうと推察されますが、宮部しかさんの談話と併わせ考えると、円随というのは男僧であったこと、尼さんは名前が明らかでないが、別にいたことがかなり確かなことと考えられるわけです。

また、宮部しかさんの「今の公会堂のところに当時の庵があって庵住さんがいました。その庵とひっついて二階建の託児所があり、二階は青年宿で、下は八畳くらいの土間で、そこに十人あまり、多いときで十四、五人の子どもがおりましたでしょうか。筧のふじさん、小森の安さんがみておられました」という談話もあります。したがって、雄平翁の託児所創設時の保母役は、尼さんでなくて、二人の未亡人であると見るのが正しい

と考えられます。

さらに、同日、同家で小森神官夫人温子さんから聞いた談話があります。同夫人によれば、「小森家では、農繁期になると近くの農家の子供を集めて面倒をみていたということで、小森一学の娘安子が子供たちの世話をしているのを見た筧雄平が、『小森さんはええことをしなる』と言って、これが託児所設立の動機となった」ということです。温子夫人は、この談話をその祖父道治氏から聞き伝えたのですが、これらの点から筧雄平の託児所創設に二人の未亡人が関与していたことは間違いのない事実と考えられます。したがって、その開設の時期について、既に前節で考証したように、明治二十年説及び明治十五年説の成立の有力な条件としても、この二人の未亡人の存在を見逃すことはできません。

さて、このような経緯によって開設された筧雄平の託児所は、宮部しかさんの話によれば、開設の当初からずっと引き続いてあったということで、たんに農繁期だけのものでなく、いわば常設されていたということです。これは、朝原書に農繁期託児所として記されていることと相違する点ですが、後に述べるように、筧の託児所が明治の終り頃から大正時代にかけて「幼稚園」と呼ばれているところからすれば、常設されていたと考えられます。しかし、その証拠となる文書的資料が、その初期の頃については発見できない現在では、宮部しかさんの談話を一つの資料として記録に止めておくだけにしておきたいと思います。

もっとも、朝原書が出版された昭和十年頃には、筧の託児所が農繁期だけのものとなっていたことは、現在の筧本家の周子夫人から筆者が再三聞いております。これは、村の非農家の奥さん方が奉仕で農繁期だけの託児所を開設され、筧本家からは特におやつのおにぎり用の米が寄贈されたり、他の家からも菓子その他の寄贈がなされていたとのことです。

朝原書で、筧雄平の託児所を農繁期託児所と断定したのは、同書に引用された相田良雄談にもとづくものと考えるべきですが、相田が聞いた筧雄平の話は託児所開設の動機が主で、その点から相田が農繁期託児所と想定したのではないかと思われる節もあります。

＊　＊　＊

筧雄平の開設後の託児所の事情については、今日までのところ、わずかに断片的な記録が残っているにすぎない状態です。今、それらを年代順にあげ多少の考察を加えてみましょう。

明治三十三年は、筧雄平五十八歳の年ですが、この年、雄平

は建物を新築して「下味野子供預り所」の看板を自書して掲げたということが、田中書「鳥取県の子供風土記」にあります。ところが、これより七年後に発行された鳥取県社会福祉協議会編「日本最初の農村託児所――筧雄平翁の事績」（昭和三十二年五月五日発行）には、雄平年譜のところに、明治三十一年、子供預り所開設」となっています。二年のずれがあるが、この頃から「子供預り所」という名で呼んだのか、それ以前からそう呼んでいたのを改めて看板を掲げたのか、その辺の事情も明らかではありません。しかし、看板を掲げたという点から考えると、それは常設の託児所であったと推定して間違いないと言えましょう。

大正二年以降数年間、美穂小学校長を勤めた安藤重平が、大正三年一月から九月にかけて執筆した「筧雄平翁」（未刊）には、翁の逸事として次のように書かれています。

「幼稚園、是レモ下味野ニアリ氏ノ経営ニカカリ保母ヲ雇傭シテ幼児ノタメニス。村民ノ幸福ヤ察スルニ余アリ」

「其ノ他幼稚園、通俗講話会等ヲ設ケテ一村ノ教化ニ努ム」

これによれば、この頃には村内では幼稚園と呼んでいたことが明らかです。そして、雄平の姉ふじと小森安子とが何時頃まで雄平の託児所を手伝ったか、このことも明らかではないが、前記の「保母ヲ雇傭シテ」という文面から察するに、この頃は二人がもう手を引いていたと推察されます。このことは次の記事からも同じことがいえましょう。

それは、大正六年十一月起筆の安藤重平稿「筧雄平略伝」（未刊）に、

「明治三十九年居村に幼稚園を建築し、同四十三年三月より開園して独力経営し、保母を傭い村民の子女を収容してその指導に努む」とあって、明治四十三年には、ふじは六十九歳、安子は六十七歳ですから、その年齢の点からも、また、「保母を傭い」という記述の点からも、この時の保母はこの二人ではないと見るのが正しいでしょう。なお、これによれば、幼稚園の建築と開園との間が四カ年もあって、間があきすぎているが、その理由も明らかでありません。三十九年に建築したが、四十三年まで保母がみつからなかったのか、または、その年に公式に認可を受けたかなどいろいろ考えられるが、いずれも憶測の域を出ません。さらに、大正七年の安藤重平稿「郷土誌資料」（未刊）には、

「幼稚園　大字下味野ニ筧雄平氏ノ私設ニカカルモノアリ。同村ノ幼児ヲ収容シ保母一名ヲ傭ヒテ養護シツツアリ、然レトモソノ設備ニハ間然スル所アリ」とあります。

この時は、雄平翁逝いてすでに二年、幼稚園の経営は、翁の遺業として後嗣武蔵によって受け継がれていたと見るべきです

が、その設備の補修や改修までは手が及ばなかったと推察されます。ちなみに、武蔵は大正十年九月二日に没しその妻二美子も翌十一年七月十八日に亡くなっています。その嗣子橘治郎は明治四十三年九月二十日生まれで、この頃ようやく八、九歳という年齢です。もっとも、祖母とみ（雄平の妻）は健在でしたが、嘉永二年生まれの七十二、三歳ですから、これ以後の幼稚園は、雄平在世当時のようにはゆかなかったであろうと察せられます。あるいは、村の肩代りなどのことも考えられますがこれも明らかではありません。ただ、蓮仏重寿稿「筧雄平伝覚書」によれば、昭和十年十月発行の「農村託児所の実体とその対策」の中に、

「我が鳥取県は日本における最初の農繁託児所開設の栄誉を負ふて居ります。実に明治二十三年鳥取県美穂村字下味野に開設されたものが我国最初の託児所であるのであります。我々は此の歴史が、唯過去のものとして物語られるに終らず、ややもすれば置き忘れられようとする農村の乳幼児の上に、現実に健康をもたらす刺激となる事を希求するものであります」

と述べてあるということです。この文から察すれば、筧の託児所（あるいは幼稚園）はこの頃すでに「過去のもの」としての存在であったか、少なくとも常設ではなかったと考えられます。

先にもふれましたが、昭和十年、筧家に嫁入りして来られた周子夫人の談話によれば、託児所は、神官夫人や学校の先生奥さんなど非農家の有志の方々が保育のことにあたられ、筧家からはおやつのおにぎりにする米などが寄贈されていたということで、それは終戦後間もなく物資が窮屈になるまで続いたということです。

いつ頃から、筧家の直接の経営が、そうした村の非農家の有志の夫人たちによって肩代りされたのか明らかでありませんが、筧雄平翁が残した愛育の精神と、その保育の事業とは、昭和の戦後までも続いたと言うことができましょう。なお、現在は、小森一秀氏夫人温子さんが中心となって有志の方と共に毎年農繁期託児所を開設しておられます。これは、小森温子夫人が昭和二十七年鳥取放送局から放送された筧雄平の事績を聞いて、その志を継ぐべく、また社会福祉の精神から始められたものと聞いております。雄平翁の志は、下味野で今日もなお生きつづけているわけです。

筧雄平と赤沢鐘美とを先駆者とするわが国の保育事業は、今日、全国的に急速に進展しつつあります。下味野の一灯が、今日の万灯となって保育の道を照らしているとでもいうべきでありましょうか。

終りに、宮部しかさんによって録音された「手まり歌」を紹介しておきましょう。

一

むこうばあさん縁から見れば
菊や牡丹や手まりの花や
手まりよう来た
あがれとおしゃる
あがれ言葉はかたじけないが
うちの嫁御は
なしてままくわぬ
腹が痛いか夏やせしたか
遂に夏やせしたこたぁないが
腹にや八月の子がござる
こな子おろして
誰におわしょうぞ
天下寺町
ちょっとぼんさまに預けた
ちょっと百ついた
まだ百つかん

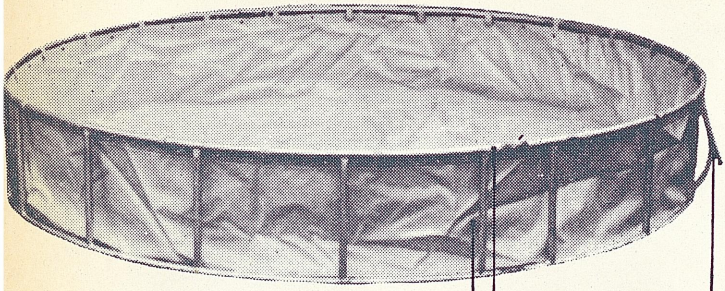
二

向う通るはおせんじゃないか
おせんこりゃこりゃ
なして髪とかぬ
くしがないかや油がないか
くしも油もかけごにござる
何が嬉しゅうて
髪ときましょに
ととは江戸にいきゃるし
新二郎は死にゃる
いとし殿御は
お江戸にいきゃる
お江戸土産に何くすもろた
くしにこうがい八寸鏡
おたいもろたけど
しやない帯で
帯にゃ短したすきにゃ長し
切って捨てより山田薬師より
鐘の音に
ちょうど百ついた
まだ百つかん

（広島女子大学）

幼児の教育　第六十九巻　第六号
六月号　©　定価八〇円
昭和四十五年　五　月二十五日印刷
昭和四十五年　六　月　一　日発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真
112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社
101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番
◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

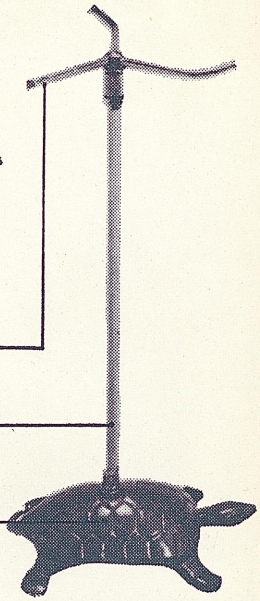
夏に園児の体力づくりを!!



キンダープール（A）

組み立て式。直径280cm、高さ45cm、400cm²のビニールカバーと整理袋つき。黄色。38,000円

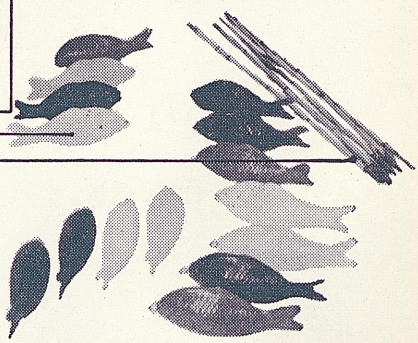
特殊特厚ビニロン製・軽くて丈夫
鉄枠は4つに分解・設置は簡単
50cmの排水管で便利



キンダースプリンクラー

プールの中に噴水を!!水道につなぐだけで勢いよく撒水し、子どもたちは大よろこび。2,800円

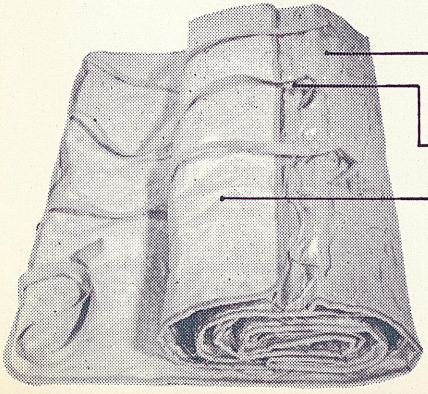
水圧で円型に回転
高さ30cm～130cmまで5段に変化
鉄製・緑色の亀さん



魚つりセット

水浴びにあきたら、プールにきれいな魚を浮かべて釣り具合を競いましょう。1セット1,200円

プラスティック製
白・赤・黄・緑・青が各3尾計15尾
竹竿は5本



キンダーロールマット

プールのそばに敷いて、甲羅ぼし!? 室外でも大活躍のマットです。ビニール袋つき。

水にぬれても平気：特殊ビニール製
このひもで巻けば持ちはこびが簡単
表が黄色・裏が白・レザータッチ

（A）長さ160cm・幅90cm・厚さ0.5cm 2,500円
（B）長さ320cm・幅90cm・厚さ0.5cm 4,700円

株式会社 フレーベル館

夏の生活を楽しく――

● ことしのテーマは「生活と習慣」です。

ことしの「なつのおともだち」は、夏の子どもの“生活と習慣”を主題としました。その中で、健康や観察など、夏に経験すべき内容が豊富に編集されています。とくに年少用（1）は、擬人化された動物の絵などで楽しさを配慮し、年長用（2）は、子どもの姿を生き生きと表現しました。

● 大型・タテ綴じL判です。

ことしもフレーベル館独自の大型L判です。この判は毎年好評をいただいており、扱いやすく、広い画面がユニークで新鮮です。

付　録

＊やってみよう　かんがえよう

家庭で簡単にできる夏の楽しい遊びを多数紹介してあります。

＊なつのせいかつ

ことしも記録しやすい横綴じのノート式で、生活表は可愛い絵柄で毎日楽しく記録できます。

51

（1）年少用
（2）年長用　―――― 各 100円

＊もよりの代理店・支社・支店・出張所にご用命ください。

発売　株式会社 フレーベル館